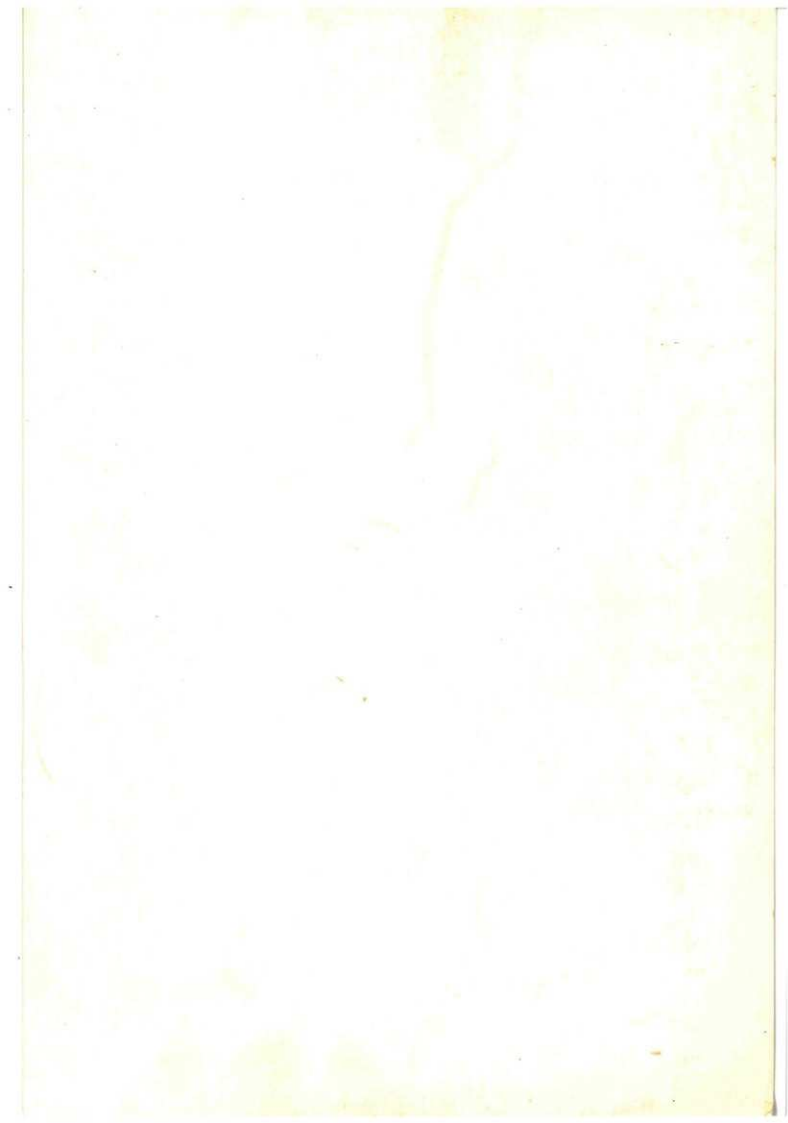


撰
要
寺
墓
塔
群

大須賀町教育委員会



発刊のことば

景江山撰要寺は、天正九年（一五八一）に横須賀城初代城主大須賀康高が、城の北西の程近い丘上に創建した浄土宗の寺で、江戸時代は六十石の朱印地を有し、十万石の格式を持っていました。

寺域の墓地には、大須賀康高、その養子大須賀忠政、横須賀城第十二代城主本多利長一族の墓塔を初めとして、歴代城主の家臣等の墓塔六百に及ぶ多数のものが存在し、その形態も種々の時代相を遺し、貴重な文化財となっています。然るところ永年の風霜に伴ない破損するもの、倒壊するものあり、また石文の消滅により判読困難となれるものあり、歴史を語る墓塔調査が速かに実施の必要に迫られていました。

この度幸にして文化庁及び静岡県教育委員会の援助を受け、静岡県文化財保護審議会委員斎藤忠先生、県教育委員会文化課、撰要寺住職泉敬常師を初めとして関係者各位のご協力の下に、昭和五十五年六月より翌年三月に亘る実施調査を完成することができたのは誠に時宜を得たもので、深く感謝と敬意を表せずにはいられません。ここに本調査報告書を刊行して調査の成果を公にすると共に、貴重な史料である本書の活用を切望し、序文とする次第であります。

昭和五十六年三月

静岡県小笠原郡大須賀教育委員会教育長

村 松 祐 次

例 言

1. 本書は静岡県大須賀町山崎に所在する景江山撰要寺の墓塔・墓標群の調査報告書である。
2. 調査は国・県費の補助金を得て、大須賀町教育委員会が実施したものである。
3. 調査は撰要寺墓塔群調査団を編成し、団長斎藤忠博士の指揮により実施したものであり、調査団の編成は以下のとおりである。

団長 斎藤 忠 (県文化財保護審議委員)

顧問 長田 実 ()

調査員 池谷 和三 (県教育委員会)

岡田 恭順 ()

平野 吾郎 ()

調査補助員 谷藤 保彦 (大正大学学生)

坂巻 隆一 ()

佐藤 知幸 ()

高橋 勝広 ()

4. 本書の原稿執筆および掲載した写真は全て斎藤博士の手になるものである。
5. 実測図および挿図の作成・トレースは平野・佐藤達雄・川崎陽子がおこなった。
6. 本書の編集は斎藤博士によるものであり、平野・佐藤が補助した。
7. 本調査に係る事務は大須賀町教育委員会がおこなった。

教育長 村松 祐次

事務局長 牧野 秀雄

社会教育主事 松本 すが子

本文目次

序	撰要寺の沿革と墓地の経営	1
一、	調査の方法	4
二、	地区別による墓標の整理とその表	4
三、	墓標の種類	67
四、	墓標の編年の序列	85
五、	墓標の変遷	93
結	撰要寺墓標に関する二、三の問題	98

挿 図 目 次

第一〇図	調査カード	3
第九図	来家太七夫妻の供養の石仏	5
第八図	Ⅱ地区の一部	5
第七図	Ⅲ地区	9
第六図	Ⅳ地区	10
第五図	V地区	14
第四図	Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ地区	16
第三図	Ⅶ地区	17
第二図	Ⅹ地区	26
第一〇図	Ⅸ・Ⅺ地区	30
第九図	Ⅻ地区	30
第八図	Ⅻ地区	33
第七図	Ⅻ地区	37
第六図	Ⅻ地区	41
第五図	XⅣ地区	46
第四図	XⅤ地区	49
第三図	XⅥ地区	52
第二図	XⅦ地区	58
第一〇図	XⅧ地区	58
第九図	墓地発見の骨壺写真	58
第八図	墓地発見の骨壺図	58
第七図	墓標群分布図(Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ地区)	59
第六図	墓標群分布図(Ⅱ地区)	60
第五図	墓標群分布図(V・Ⅶ・Ⅸ地区)	61
第四〇図	墓標群分布図(Ⅷ・Ⅹ・Ⅻ地区)	62
第三九図	墓標群分布図(XⅣ・XⅤ・XⅥ地区)	63
第三八図	墓標群分布図(XⅦ地区)	64
第三七図	墓標群分布図(XⅧ地区)	65
第三六図	墓塔実測図(Ⅰ地区—1・2)	69
第三五図	墓塔実測図(Ⅱ地区—4・5)	70
第三四図	墓塔実測図(Ⅱ地区—6・7・20)	71
第三三図	墓塔実測図(Ⅱ地区—1・2)	72
第三二図	墓塔実測図(Ⅱ地区—3・8)	73
第三一図	墓塔実測図(Ⅱ地区—11・12・13・14・15)	74
第三〇図	墓塔実測図(Ⅱ地区—22,Ⅶ地区—35,Ⅹ地区—1・2,Ⅻ地区—48・61・62)	75
第二九図	墓塔実測図(Ⅱ地区—30・35,Ⅳ地区—34,Ⅶ地区—36,Ⅹ地区—1)	76
第二八図	墓塔実測図(Ⅱ地区—16・18・19・28・29,Ⅵ地区—2,Ⅶ地区—14,Ⅹ地区—19)	77
第二七図	墓塔実測図(Ⅱ地区—17・32,Ⅲ地区—7,Ⅳ地区—51,Ⅵ地区—9,Ⅹ地区—25・33・34,Ⅻ地区—64,ⅩⅣ地区—18)	78
第二六図	墓塔実測図(Ⅱ地区—21・36,Ⅲ地区—2,Ⅳ地区—1,Ⅵ地区—7・8,Ⅶ地区—1)	79

第四一図	板状碑の正面と側面(II地区—29)……………	80
第四二図	三角頭墓標の諸形式……………	81
第四三図	三角状弧頭・弧頭・二重弧頭・隅丸方頭・隅丸 ・二重方頭・盛り上げ方頭・三角錐方頭……………	82
第四四図	各面の隅取りのある三角頭角碑(XI地区—33)……………	83
第四五図	笠付方柱状墓標の笠部……………	83
第四六図	位牌形笠付方柱状墓標……………	83
第四七図	仏像付背光状墓標(IV地区—15)……………	84
第四八図	自然石の墓標……………	84
第四九図	宝篋印塔隅飾の各種形式……………	95
第五〇図	五輪塔 火輪部の屋根形式……………	96
第五一図	無縫塔上部の各形式……………	97
第五二図	文字の記載……………	99
第五三図	梵文表現の二例……………	100
第五四図	蓮の葉と蕾の表現と水受け……………	100
第五五図	開き蓮弁の各形式……………	101
第五六図	立葵の家紋の諸形式……………	102
第五七図	頭書の梵字と紋章……………	103

図 版 目 次

第一	撰要寺の位置(航空写真)	第二五	IV地区の墓標(無縫塔)(1)
第二	撰要寺周辺地形図	第二六	IV地区の墓標(2)
第三	墓地全体図	第二七	IV地区の墓標(3)
第四	撰要寺墓地遠望と山門	第二八	IV地区の墓標(4)
第五	大須賀家墓所(I地区)	第二九	IV地区の墓標(5)
第六	大須賀康高墓塔	第三〇	V地区の墓標
第七	大須賀忠政墓塔	第三一	VI地区の墓標
第八	本多家墓所 (II地区)	第三二	VII地区の墓標(1)
第九	本多康重墓塔(II地区)	第三三	VII地区の墓標(2)
第一〇	本多康紀墓塔(II地区)	第三四	VII地区の墓標(3)
第一一	本多忠利墓塔(II地区)	第三五	VIII地区の墓標
第一二	II地区 宝篋印塔等の並列状態	第三六	IX地区の墓標(1)
第一三	宝篋印塔(II地区)	第三七	IX地区の墓標(2)
第一四	宝篋印塔(II地区)	第三八	X地区の墓標
第一五	宝篋印塔上頂部(II地区)	第三九	XI地区の墓標(五輪塔)(1)
第一六	宝篋印塔(II地区)	第四〇	XI地区の墓標(2)
第一七	宝篋印塔(II地区)	第四一	XII地区の墓標(1)
第一八	宝篋印塔(II地区)	第四二	XII地区の墓標(2)
第一九	宝篋印塔(II地区)	第四三	XIII地区の墓標(1)
第二〇	五輪塔 (II地区)	第四四	XIII地区の墓標(五輪塔)(2)
第二一	II地区の墓標	第四五	XIV地区の墓標
第二二	II地区の墓標	第四六	XV地区の墓標
第二三	II地区の墓標	第四七	XVI地区の墓標
第二四	III地区の墓標	第四八	XVII・XVIII地区の墓標(左三基はXVIII地区)

序——撰要寺の沿革と墓地の経営

撰要寺は、静岡県小笠郡大須賀町山崎一三〇二の地にある。景江山の山号をもち、浄土宗の宗派に属する。独立した丘陵地の西がわにあり、前面に平地をのぞむが、この平地をへだたせて南西約三〇〇メートルには、同じ独立丘陵上に横須賀城跡があり、国の史跡の指定を受けている。

この横須賀城の初代の城主大須賀康高は、徳川家康の命を受け武田勢を攻略するに当り、はじめ撰要寺に布陣したとも伝えられている。のち、横須賀城に居城するに及び、天正九年（一五八一）には、发屋春阿和尚を請じて、撰要寺を創建させたという。「横須賀根元歴代明鑑」は、同町浄土真宗善福寺二代の住持釈祐念師の筆になるといわれ、史料として信憑性をもつものであるが、同書には、

私云撰要寺は往古は高天神の麓に有之撰要寺ヶ谷と申伝旧跡有之由、五郎左衛門殿横須賀の城主に被仰付節被為得上意建立の寺也。当寺傾五十五郎左エ門殿寄附十石出羽守殿寄附右春御朱印也。

とある。なお、发屋春阿和尚は、中田村の松風山応響院二十九世の僧であった。

ちなみに、景江山の山号は、西が入江に面し風光の絶景の地にあつたことにもとづくという。また撰要寺の名は、「撰要本願集」と「往生要集」から、それぞれ「撰」と「要」の文字を採つたといわれる。

横須賀城初代の城主康高は、天正十六年六月二十三日に死去した。「横須賀根元歴代明鑑」には、

天正十六年六月二十三日大須賀五郎左エ門殿撰要寺へ参詣、本堂如来前に而逝去也。

とある。

とにかく、初代城主大須賀康高は、撰要寺に埋葬された。二代（五代）忠政も、慶長十二年（一六〇七）九月十一日に逝去し、康高の墓に隣りして葬むられた。忠政は、神原式部大輔の二男で、大須賀家の家督を相続し、出羽守となつた。「横須賀根元歴代明鑑」に、

慶長十二年出羽守殿病氣に依り為養生上京、有馬湯沓之湯同年九月十一日伏見にて逝去し給う。横須賀撰要寺に送葬、号華馨院殿前羽州藤原安大居士と是也。

とある。

このようにして、城主の菩提寺として高い格式をもち、法燈がつづけられたが、十二代本多利長が、正保二年（一六四五）城主にな

るに及び、父・祖父等の墓標を三河の岡崎から海路運んで、寺の本堂の奥に当る丘陵の背後に宮んだ。あたかも横須賀城からは、その北東に望まれる一角に当る。本多家の家中も又、これにしたがって墓標を移転したものもあり、また直接この地に墓を宮んだものもあつた。撰要寺の現住職の泉敬常師のまとめた文献によれば、墓地内にある本多家関係の墓標は一・二基を数えるという。²⁾

つづいて、天和二年（一六八二）西尾忠成が藩主となり、その後幕末まで西尾家は城主としてつづき、撰要寺は、家中の人々の墓地としても、格式をもちつづけた。『横須賀根元歴代明鑑』には、

元文二巳年六月二十三日大須賀棟百五十年の御忌に付、町中庄屋間屋撰要寺へ被召寄、何れも麻上下にて参り町中より青銅二〇〇〇撰要寺へ冥加錢として御香奠を差上げる。

とあり、また、宝曆十年三月十三日西尾隠岐守が江戸で逝去し、竜眠寺で法事を営む際、

竜眠寺御位牌に焼香の御寺方三月廿八日一番撰要寺二番本願寺三番善立寺四番浄泉寺

とあり（『横須賀根元歴代明鑑』）、撰要寺の格式が知られる。

つづいて高天神城主一族の小笠原氏の墓標が、天正・文禄・慶長・寛永の頃、五輪塔の形式をもって設けられ、墓地が宮造された。一方、江戸小船町で、廻船問屋を宮んだ来家太七夫妻を供養したとみなされる石造如来像が、元禄十四年六月十五日、石工佐藤伝七によつて大須賀康高・忠政の墓所に当る墓地の入口の高台に宮造されており、豪商が早くも墓地の重要な一角を占めたとも考えられるが、藩主家中の墓のほか、江戸時代の後半期には、町人等の墓標も見られており、撰要寺のこの頃の一性格を示している。

撰要寺は、このような歴史的背景のもとに、その墓地は天正十六年の大須賀康高の宝篋印塔を初現とし、江戸時代には多数の墓標が宮まれ、しかも明治・大正をへて、現代に及んでいる。

幸いにして、寺院にはその創建の当初からの過去帳もそなわつており、寺院の由緒はもとより、墓標に刻された戒名や、死亡年月日を知る上に参考になることが多い。

注

1 昭和五十五年刊行の『大須賀町誌』にも紹介されている。

2 寺院住職及敬常師によつてまとめられた『横須賀根元歴代明鑑』(昭和四十九年)による。

撰要寺墓塔・墓碑調査カード				No.				
位置				現状				
大きさ								
形式								
								銘 文
調査者		調査 年月日	年 月 日	写真 有無	図 有無	拓本 有無		

第1図 調査カード(実物大)

一、調査の方法

撰要寺には、境内地に二基、墓地におよそ七〇乃至八〇〇基の墓塔・墓標が存し、現在なお墓地として存続している。今回の調査は、墓塔の初現としての天正十六年の宝篋印塔から江戸時代及び明治十年までの墓標をとりあつた。総じて四〇〇基である。これらの資料を整理するときには、あらかじめ境内地の一部を含め墓地全体について百分の一の測量図を作成し、墓塔・墓標のすべてを記入した。そして、これらを整理する便宜上、十八のブロックにわけた。このわけ方の基準は、墓標があるまとまりを示しているものや、高低等の区別がある程度あらわれているものによつたが、必ずしも適切でないものもある。また、ブロックの番号の場合、I IIの特別なものをのぞき、III以降は、参道に進んで右がわを偶数、左がわを奇数とした。

これらのブロック別を設定するとともに、所定のカード（前頁挿図一）を作成して、その一つ一つについて、形式・大きさ・銘文等をしらべて記入し、あわせて写真を撮影した。

一方、寺院には、過去帳が残されている。この過去帳をコピーし、私自ら調査し、その墓標の刻字も照合した。[※]

※ 従来、一墓地について徹底した調査を行った例は少い。この中で曾て坪井良平氏が、京都府相楽郡木津町で昭和七年の頃約三三三基について調査したことは前掲的なものであり、

氏はこの場合八百の地区を設定した。「山城木津惣墓標の研究」『考古学』一〇一六、昭和十四年

今回の地区設定もこれにならうとともに、古墳群について試みられている方法論をとった。

なお、他に石碑については、宮城県名取郡内ものを丹念にしらべた松本源吉氏の「陸前名取郡の古碑」（『考古学』八一―九一四）があるが、そのほか、各市町村史等にも調査の成果が発表されている。

二、地区別による墓標の整理とその表

調査に当っては前述のように、便宜一八区にわけ、図面に照合しつつ、地区別に番号をつけて整理した。次に表を中心としてこれを記載する。

I 地区 本堂に向って左がわに、一段高い墓所をなす。この地域のみは墓地でなく、境内地の地目をもつ由である。二基の宝篋印塔で向って右のものは、初代横須賀城主大須賀康高の墓であり、天正十六戊子年六月廿三日の紀年銘がある。向って左のものは、二代（五代）忠政の墓で、慶長十二丁未年九月十一日の紀年銘がある。二基について表記すれば、次のようである。

なお、この地区の裏手、墓地への参道の左がわの高台の一角に、八角基壇の上と墓台の高さ五〇センチ連華台座を含めた仏像の高さ二〇六センチの石造如来像がある。来家太七夫妻の供養塔ともみなされる。八角基壇の裏には、元禄十四年六月十五日の紀年銘が刻され「石工佐藤伝七忠尚」の刻字も見られる。

番号	形状	高さ	幅	表	銘	文	現状	写真
①	宝篋印塔	四〇	四〇	高麗寺殿前堂舎 東岸浄春居士 堂	千時天正十六戊子年 六月廿三日	【過去帳】には巳五年 六月廿三日六十二才去 とあり		
②	宝篋印塔	四〇	四〇	穴	花巻院殿前羽州 神			

番号	形状	高さ	幅	表	銘	文	現状	写真
				泰若岩号安居士 供	千時慶保十二丁未年 九月十一日			

II 地区 墓地の最も奥の高台上に存するもので、すべて西面して並列している。十二代城主本多越前守利長が、三河岡崎から運んだ、本多豊後守康重（向って右）本多豊後守康紀（中央）本多伊勢守忠利（向って左）の墓標としての大型五輪塔が、石垣の中に並置されている。さらにこの墓所から、向って右から数えて宝篋印塔・五輪塔・板状碑等が四三基並列している。次の表示の如くである。



第3図 II地区の一部



第2図 来家太七夫妻の供養の石仏

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	裏	側面	現状	写真
①	五輪塔	三三 (金剛)	三三	三三	慶長十六年二月廿二日 居		「過去帳」には鳳翔院殿 前豊洲大寺降山道雪居士 とあり	最上欠	図9
②	五輪塔	二六 (土)	二六	二六	本多前登後守 居		四方に梵字あり	風化	図10
③	五輪塔	二四 (土)	二四	二四	本多前伊勢守 居		四方に梵字あり	最上欠	図11
④	宝篋印塔	三〇	三〇	三三	藤原忠利 士				図12
⑤	宝篋印塔	三三	三三	三三	寛永十四丁丑 日蓮禪定尼 七月十四日		「過去帳」には松寿院殿 月鏡日蓮禪定尼とあり		図12
⑥	宝篋印塔	三三	三三	三三	慶安 己丑 妙法蓮華經 安住院殿清若日仙 六月廿八日				図15
⑦	宝篋印塔	三三	三三	三三	承應四 甲午 妙法蓮華經 光舟院殿寶鏡日久堂 閏月上旬三日				図16
⑧	宝篋印塔	三三	三三	三三	崇徳神安良心 明暦丁酉年				図17

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	裏	側面	現状	写真
①	五輪塔	二六	二六	二六	理性院殿 大禪定尼 七月二日				図17
②	五輪塔	三三	三三	三三	光寿院殿權大僧都 船長祐心居士 寛永廿一年六月四日				図18
③	宝篋印塔	二六	二六	二六	承應二癸巳年 長勝院殿 六月二日				図19
④	宝篋印塔	二六	二六	二六	清譽道温大信士 寛文元年 五年十一月廿八日				図20
⑤	五輪塔	二四	二四	二四	寛永九癸丑年 寛霜院堂 童子 霜月八日				図20
⑥	五輪塔	二六	二六	二六	本多弥太郎 琢宝永玉大禪定門 成廿 千時寛永十五年十月 寅六				図20
⑦	五輪塔	二六	二六	二六	本多前登後守 登巖秀哲居士 千時寛永十五年戊寅十二月 廿七日				図20

⑤ 五輪塔	④	③ 宝篋印塔	②	①	⑥	⑦ 五輪塔	⑧ 五輪塔
一臺	一臺	三臺	一七	三	一〇〇	一臺	一臺
四三三	三三三	三三三	四三三	四三三	四三三	四三三	四三三
寛永廿五年未 章	寛文十庚戌年 六月七日 生蓮院殿華屋幻斬大童子	寛文四申辰歲 得生院殿法雲淨心大禪定門 五月十三日	慶長十年己巳年 藤原 乾藤秀村居士 幽儀 本多藤四郎 八月廿三日 重章	元和三丁巳七月廿八日 泰空庵安居士 施主本多基五右衛門	元和八毫 梅院殿接室清引太女給 朔月四日	正保二年乙酉 夢覺了持童子 三月二日	千時寛永七年庚午 露月淫耳童子 六月廿八日
四方に梵字あり						四方に地水火風空の刻 文あり	四方に地水火風空の刻 文あり
図22	図21	図21	図21	図21	図21	図20	図20

⑤ 五輪塔	④	③	②	①	⑥ 五輪塔
一臺	一臺	一臺	一臺	一臺	一臺
四三三	四三三	四三三	四三三	四三三	四三三
寛永廿五年未 章	寛文六丙午 十月十六日 本多弥五兵衛 為幻清童子已 施主	寛文六丙午 十月十六日 本多弥五兵衛 為幻清童子已 施主	寛文六丙午 十月十六日 本多弥五兵衛 為幻清童子已 施主	寛文丙卯 早普救喜園因 九月四日	寛永廿五年未 五月廿七日 光月良秀童子 子 正月廿六日
四方に梵字あり					四方に梵字あり
一部欠	一部欠	一部欠	一部欠	一部欠	一部欠
図22					図22

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	裏	側面	現状	写真
⑧	五輪塔	二六	四三	四三	慶安元戊子年 喜月直光僧女 八月廿九日				
⑨	五輪塔	一八	四三	四三			四方に梵字あり	風化	図22
⑩	五輪塔	一四	四三	四三			四方に梵字あり	風化	図23
⑪	五輪塔	七	四三	四三	山下後庄左衛門基				図23
⑫	五輪塔	七	四三	四三	森明空清四僧女				図23
⑬	五輪塔	七	四三	四三	二箇月給雨童子				図23
⑭	五輪塔	一四	四三	四三	俗名本多 一峯道無 十郎衛門政定				図23

番号	形式	高さ	幅	厚さ	表	裏	側面	現状	写真
①	六	六三	六三	六三	航海樂運 俗名本多十郎右衛門重政				図23
②	六	六三	六三	六三	〇〇王 〇年十月九日 應霜清 〇〇童女 本多十郎衛門殿				図23
③	六	六三	六三	六三	實 本理源秋 俗名本多重郎右衛門重政				図23
④	六	六三	六三	六三	〇〇十二月 〇〇				図23
⑤	六	六三	六三	六三	靈願院智光元龜大師				図23
⑥	六	六三	六三	六三	本多十郎右衛門政義妻 施主本多 〇〇				図23
⑦	六	六三	六三	六三	延宝六戊午歲九月廿二日 武州神奈川 〇〇卒二十七歳 北塚田氏孫生國相州小田原 曆住遠州横須賀				図23
⑧	六	六三	六三	六三	法名釈知悦正定衆位				図23
⑨	六	六三	六三	六三	本多 〇〇 石衛門 施主				図23
⑩	六	六三	六三	六三	〇〇母位				図23
⑪	六	六三	六三	六三	延宝六戊午年八月十六日施主 太田八郎右衛門基				図23

IV地区 墓地の奥に向って左がわにあたり、入口のそばの一区画の墓域である。入口に寛永十九年銘の大型の板状三角頭のもの立つが、恐らく供養碑であろう。また入口から入ると、すぐに慶長十四年銘の小型の宝篋印塔がある。この墓域には、開山の春阿大和尚の無縫塔をはじめ歴代住職の無縫塔がならんでいるが、その他、笠付角碑や宝珠付の角碑もある。

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	文	現状	写真
④	無縫塔	六			当山中興			図25
⑤	無縫塔	六			然運社并普拱阿大和尚 正保三丙戌八月廿四日			図25
⑥	無縫塔	六			寛文四乙巳十二月十六日 運運社聖賢玄怒大和尚			図25
⑧	無縫塔	六			天運社聖賢魯僧在公大和尚 寛永八辛未五月十一日			図25
②	無縫塔	六			盛運社天誓炭南無分大和尚 慶長十七乙十一月二日			図25
①	無縫塔	二六			盛運社友原春阿大和尚 天正甲十二年三月二天	【過去帳】には三月廿六日とあり		図25

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	文	現状	写真
⑤	無縫塔	二三			本運社阿彌陀源宗大和尚 享保十五庚戌年九月廿六日	(墓壇正面) 上 人		図25
⑥	無縫塔	二一			高運社聖賢新阿寂玄大和尚 享保三戊戌年十月十五日			図25
⑦	無縫塔	六			音運社聖賢文怒大和尚 延享四年十一月七日		身欠損	図25
					信運社聖賢傳説大和尚 貞享四丁卯正月十六日			
					照運社友原春阿大和尚 寛文七丁未八月三日			



第5図 IV地区

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔
二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六
三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七
朝養上人	朝養上人	朝養上人	朝養上人	朝養上人	朝養上人	朝養上人
寛延三年 (左面) 寛延三年 (右面) 庚午九月廿四日 『過去帳』には香澤社禪 覺十丈阿写海大和尚と あり	十八世威養上人木阿玄常大和上	十七世法養上人	現養上人光阿隆大和尚	照養白臘上人	開養上人	開養上人
安政三丙辰年十一月六日卒 寺因院殿右衛門 小徳久麿齋 同人妻	十九世謙養敬戒上人 二十世仏養墨常上人 (右面) 弘明治四十一年六月廿三日 (右面)					
図26	図26	図26	図26	図26	図26	図26

⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔
二二	二一	二〇	一九	一八	一七
三三	三二	三一	三〇	二九	二八
現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士
文化五國辰年十一月十七日 俗名寺岡木兵衛 久種	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士	現光院大菩薩阿彌陀佛居士
寛延三年 (左面) 寛延三年 (右面) 庚午九月廿四日 『過去帳』には香澤社禪 覺十丈阿写海大和尚と あり	十八世威養上人木阿玄常大和上	十七世法養上人	現養上人光阿隆大和尚	照養白臘上人	開養上人
安政三丙辰年十一月六日卒 寺因院殿右衛門 小徳久麿齋 同人妻	十九世謙養敬戒上人 二十世仏養墨常上人 (右面) 弘明治四十一年六月廿三日 (右面)				
図27	図27	図27	図27	図26	図26

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
三	二	一	一	一	一	一	一	一	
三	二	一	一	一	一	一	一	一	
元文二巳四月三日 明了院觀音園勝居士 俱會 明蓮院光榮栄心大師	正徳元辛卯年 傳元往學生秋居士 靈位 九月廿三日	天二 觀音殿光顯善女 宝曆癸酉三月五日	嘉永六癸巳年五月十二日	堂 二 堂觀院觀音淨信居士 兼 □樹院澄善清大姉 福光院觀音清輪大姉 靈位	堂 二 堂觀院觀音淨信居士 正月十九日大原助右五門 祖父とあり (右面)	天和二壬辰歲六月廿四日 大原休口父母姉	正徳三癸巳年 堂眞院眞善浄長居士 靈位 六月廿六日	転読蓮南直女靈位 寛保元辛酉十月廿八日	静心院安樂誦道居士 靈誓院鎮誓顯大姉
「過去帳」に明和元甲六月廿七日大原長兵衛后ノ母とあり	地蔵尊彫刻付き	「過去帳」に智薫重女とあり	「過去帳」に正徳四甲午正月十九日大原助右五門祖父とあり (右面)	天和二壬辰歲六月廿四日 大原休口父母姉	地蔵尊彫刻付き	天保九戌年二月廿日 (右面) 弘化五戊申二月廿二日と過去帳にあり	天保九戌年二月廿日 (左面)	天保九戌年二月廿日 (右面) 弘化五戊申二月廿二日と過去帳にあり	
一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	
図28	図28	図28	図28	図28	図28	図28	図28	図28	

⑥	⑤	④	③	②	①
一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一
福觀院蓮誓顯玄居士 彦孫院誓善妙觀大姉	論松院蓮誓徳誓居士 良明院慈誓徳貞大姉	松本院誓善口普居士 即本院誓善觀大姉	勝養院超誓高山無誤居士 雲精院明誓月影誓應大姉	心池院源誓清居士 唯孫院見誓真大姉	自然院清誓冷道居士 續相院然誓清好大姉
(左面) 天保八年五月十五日 (右面) 天保二年七月十五日	(右面) 文化三丙寅年八月廿有九日 良 天保三壬辰年七月廿有五日 (左面) 貞太郎	(右面) 大原長兵衛實 墓 同人妻 (左面) 松明和三丙戌年二月十二日 即同年 三月十七日	(左面) 宝曆四甲戌年四月十七日 (右面) 宝曆十庚辰年七月初七日 「過去帳」には七月六日とあり	(左面) 貞享四丁卯年六月初七日 (右面) 宝永四丁辰年十二月十五日	(右面) 寛文十乙巳五月十七日
一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損	一部欠損
図29	図29	図29	図29	図29	図29

①	番 号	形状	大いさ	銘	文	現状	写 真
		高さ	幅	表 面	側 面	現 状	写 真
		高さ	厚さ				
		秋吟童子					
		(左面)					

	番 号	形状	大いさ	銘	文	現状	写 真
		高さ	幅	表 面	側 面	現 状	写 真
		高さ	厚さ				
		金山如幻童子					
		壬申七月□□					



第6図 V 地区

V地区 奥に向って左がわの入口に近いところの地区に当る。VI地区と参道をへて相対する。新しい角石の墓標も多いが無縫塔や笠付角碑もある。この地区の中で目に着くのは、観音坐像を上にした角石のあることで、天保十五年(一八四四)・弘化二年(一八四五)の紀年銘があるが、一種の供養塔とみなされる。

②	番 号	形状	大いさ	銘	文	現状	写 真
		高さ	幅	表 面	側 面	現 状	写 真
		高さ	厚さ				
		寛永十九年庚九月十七日					
		寛永十九年庚九月十七日					
		生山□國受定					
		光□□心					
		於三□□崎六十八歳而卒					
		物□□右衛門					
		馳后藤善信士					
		速著智忍信女					
		(左面)					
		天保九戌十月十六日					
		寛延己十二月十二日と「過去帳」にあり					
		日と「過去帳」にあり					

	番 号	形状	大いさ	銘	文	現状	写 真
		高さ	幅	表 面	側 面	現 状	写 真
		高さ	厚さ				
		寛西岳造方信士					
		清善光岸信士					
		光善興崇信女					
		清 文久二戌一月六日					
		父善					
		【過去帳】には八出家					
		敬ス故文政九再戌十月廿六日トスとあり					
		【過去帳】には文政九再戌十月廿六日とあり					
		通 文政三辰四月廿三日					
		【過去帳】には天保三壬辰四月廿三日とあり					
		(右面)					

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
			無縫塔				
叢	二五	二〇	四	三	六	三	四
三三 一六	二二 一六	元三 三三		三三 三三	元二	三三 三三	三三 三三
弘化五戊申年		法輪了敬居士 南無阿弥陀佛□□□ 智月了信士	覺菩提蓮法子	俊光院忠孝孫英居士 光善妙英僧女	信勝院殿隆日宜居士 顯普院殿尊法道居士 流普院響善抄通大姉	明治七年戊午 顯明院練香慈光大師 十二月十三日	
		(左面) 法 天保十五辰正月十一日 智 弘化二巳年八月廿五日 (右面) 当寺十七王 法善蓮元	(左面) 当寺十七王弟子	(左面) 明治七年十二月廿三日 (右面) 明治二十年五月九日と 「過去帳」にあり	(左面) 信 慶応四年五月廿一日 鼓 明治七年戊一月十日 (右面) 原田氏	(右面) □門一 六月廿一日 (右面) 小林鉄右衛門信次書	
	刻露						
	図30	図30	図30	図30	図30	図30	

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
			無縫塔				
		三	三	三	一	一	一
		三〇 一六		元 三	三 三	元 三	元 三
		天宗院兼一西居士 八月十八日云	寛永廿一申歲 元禄二己巳歲 十二月十七日	月牌 心光院空善入居士覺位 十月 □住院□書 □	定心院禮善十郎兼行居士 關西院響善到榮園因圖	顯正院本誓重顯宗賢居士 顯正院坤養聖國善賢大姉	知方静入童子 三月十有三日
		(左面) 天保十三壬寅年五月十一日 七代孫吉田條太郎宣照再建元 月牌□或西□施立右同主 (右面) 生□ 吉田三郎兵衛重儀墓			(左面) 定 安政元年甲寅年十一月九日 寺岡小野久借 警 嘉永六癸丑年正月十一日 同人 □	(左面) 源 天保十三壬寅年四月廿六日 展 嘉永七甲寅年十一月四日 同人妻	
		風化					
	図30	図30	図30	図30	図30	図30	

VI地区 参道右がわにある。一群の三角頭板碑の大型のものが参道に向ってならべられており、正徳・万治・慶長等の
 紀年銘がある。これらには、特に、碑身の下には蓮花と蓮蕾とを浮き彫りにし、その下に水盤状のくぼみのあるものがあ
 り、この頃の墓標の丹念な彫風をそなえた一形式がうかがわれる。なお、これらは本多家家臣の墓が移置されたものとみ
 なされ、「過去帳」には、該当の戒名のものがない。

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	側	現状	写真
①	大い	二尺	一尺	二寸	正保二年乙酉 生開貞往信女 葬乙酉九月晦日	(基壇正面) 施主 磯原仁右衛門尉		図31
②	大い	一元	一尺	二寸	万治二年寛 大安通意居士 己亥秋七月盡	(基壇正面) 施主 磯原仁右衛門尉		図31
③	大い	二尺	一尺	二寸	慶安五年辰年 華屋清心信女 三月十日	(基壇正面) 施主 磯原仁右衛門尉	上那欠	図31
④	大い	二尺	一尺	二寸	万治三年 花光寺春信男 三月十七日		上那欠	図31

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	側	現状	写真
①	大い	二尺	一尺	二寸	登屋全通信士 五月一日			図31
②	大い	一元	一尺	二寸	寛文十一庚寅年 称善良念大徳 正月七日		欠落大	図31
③	大い	二尺	一尺	二寸	享保三丙戌六月十一日 元禄五年甲申二月朔日 勝譽超覺上智光理護信女 享保十六辛亥 實運社眞誓願の大徳 七月二十四日			図31
④	大い	二尺	一尺	二寸	光野利心信女林清妙相信女 延宝二甲寅四月十九日 貞享元甲子五月廿四日			図31



第7図 VI・VII・X地区

④	③	②	①
六	六	六	六
元	元	元	元
享保三戊戌 寛養覺心信士 十二月廿二日 明徳元乙未 □生心誓墓願□□□ 三月三日 賞養浄園信士 各堂 瑞雲智勝信女 蓮養善念秋覺信士 賞位 徳養善念寿慶信女	俗名 潮田覺之進 【過去帳】には誠正院實 覺心信士とあり 【過去帳】には心誓寿願 信士とあり (右面) 元禄十丁五十一月晦日 (左面) 寶徳段右衛門勝房 墓 (右面) 加藤氏勝房 施主 □子勝往之 (左面) 生□□塚□□屋 (右面) 当寺禪堂□來而免心也	下郷が 埋れて いる	一那欠
図31	図31	図31	

④	③	②	①
六	六	六	六
元	元	元	元
女慶信士□誓□墓 □女□誓祐信士 津社勸學清閑大徳	生園佐□川石田住戸田氏 (右面) 当寺禪堂□□布果□生 割落 (左面) 怡法尼沙抄 林清福門 □注社大登原貞和尚 □禪定門 妙徳禪尼 (右面) 天和三癸辰正月四日 貞孝四丁卯十月廿九日 撰養即園信士 心岸即修信士 秋養妙園信女 暫夢庵子 元禄元戊辰八月十一日 元禄元戊辰十二月十一日	一那欠	一那欠

Ⅷ地区 八基の五輪塔も存するが、潮田家の墓所もあり、笠付角碑が多い。これらの中には、万延二年（一八六一）明治二年（一八六九）のものもあり、比較的新しい形式のものあることがわかる。

三角頭板状碑などもあり、また、奥に進んだところに小径の両側に墓標がならんでいる。

「南無阿弥陀仏」の名号をきざんだ角碑もあり、一種の供養塔と思われるが、紀年銘はない。

この中で南面するものは、住職の話によれば、町人の墓標という。



第8図 Ⅷ地区

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	番号
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	形状
										高さ
										幅厚さ
										表面
										側面
										現状
										写真
										図32

⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	番号
										形状
										高さ
										幅厚さ
										表面
										側面
										現状
										写真
										図32

	(欠番)			
芳月童女 六月十五日	三三 安院實誓 豐大姉 明治六年九月 □□□ 詳安童女	三三 行實院心實是道士 法摩寂然信女 實嚴信士 春光童子	三三 通信院住職善生信士 号屋名懸信女	三三 明治六年庚申年 深廣院欣誓勇道居士 八月二十九日
弘化四丁末十月 杉江藤八則壽再建元 (右面) 鈴木	(左面) 通文化元字十月十三日 法文化七年十二月二十八日 寛文化八癸十月二日 (右面) 孝子 村田八十治 春光童子は過去帳に 天保三壬辰十二月廿九日 とあり	(左面) 天明七癸年十二月五日 俗名 村田嘉内 (右面) 文化五戊四月廿二日	(右面) 村田氏 表面刺 落	(左面) 七代目俗名三輪彦十郎久遠行年 六十三才 (右面) 自先孫六代目 東京府 市ヶ谷町安養寺二辨有三輪氏
長寿院實誓珍山居士	三三 福誓西入信士 實位 深誓鉢心善女	三三 關山匠匠上座 月輪節間大姉 智泉童子 深誓密傳禪遊居士	三三 女員位 主杖住左衛門	三三 深光院兼誓妙池大姉
長明治三庚午年十月五日 皇明治五壬申年八月二十六日 (右面) □明治八乙亥年十月十日 淨明治六癸酉年十二月廿九日 静岡縣土岐谷氏墓	(左面) 享保四巳亥 三月十三日撫主 (右面) 享保十六辛亥 五月十二日 板山氏 地蔵尊か	(左面) 常力 □文化四 年 □月初七日 □政六 年 □十月二十日 □享和元 酉 □文化二 酉 (右面) 慶應享三丙寅年五月十一日 月室曆五乙亥年十月十六日 智明和三丙戌年十月二十四日 徳天明七丁未年八月十八日	欠損大	(左面) 明治七年十一月廿一日

番号	形状	高さ	幅厚さ	表面	側面	現状	写真
④	五輪塔	二〇	三三	明治五十年 春海童女 二月五日	(右面) 浜根貫□土族 小笠原守之妻 (右面) 小笠原守守之長女	風化激	図33
⑤	五輪塔	二〇	三三	月経露心淨定門 中島□兵衛 寛永二年二月十四日	四方に梵字あり	風化激	図33
⑥	五輪塔	二〇	三三	實山道一團定門 地 中島半兵衛重昌 慶長七壬寅□七日廿九日	一面は漢字で地水火風空 四面に梵字あり 他面は梵字 【過去帳】には龍峯院とあり	風化激	図33
⑦	五輪塔	二〇	三三	忠實院花岳因栄 慶安三庚寅年六月廿五日	(地の部分右面) 施主中嶋半兵衛正春 四方に梵字あり	風化激	図33
⑧	五輪塔	二〇	三三	萬治元戊戌年信 地 昭善業大 十一月十七日土	地水火風空の文字正面のみあり	風化激	図33

番号	形状	高さ	幅厚さ	表面	側面	現状	写真
⑨	五輪塔	六	三三	寛文十庚戌年 □東室遺本上庫寛堂位 四月四日 俗名中嶋□□	(右面) 寛文八戊申天三月□□ (左面) 俗名中	剝落部 分あり	図34
⑩	五輪塔	六	三三	南無阿弥陀佛	(左面) 潮田景雄妻 (右面) 寛永元戊申十一月十日	剝落部 分あり	図34
⑪	五輪塔	六	三三	定心院實尊貞興大姉	(左面) 潮田景雄妻 (右面) 天保三壬辰年十月十六日	剝落部 分あり	図34
⑫	五輪塔	六	三三	松寿院三尊得勇水築居士 讀光院性善法室貞國大姉	(左面)は 【過去帳】に天保十己亥 十月三十日とあり	剝落部 分あり	図34
⑬	五輪塔	六	三三	文政十丁亥年 讀光院顯尊慧馬智貞大姉 八月十二日	(右面) 潮田寛右衛門景福後妻	剝落部 分あり	図34
⑭	五輪塔	六	三三	舟本院徳智通惠堂居士	(左面) 文化元甲子年七月初三日	剝落部 分あり	図34

Ⅷ地区 IV地区より一段高いところにある。江戸時代でも比較的新しいものが多いが、中には、正保元年（一六四四）の三角頭版状碑の例もある。

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
光	臺	兜	六		凸	凸	形状
二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	高さ
二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	幅
二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	厚さ
早世浄月重女	転相院教養立善居士 教誠院善思相大師	誠善興道信士			寛文二壬寅 本善妙御信女 六月廿八日 施主正	〇〇三〇天 〇〇三〇土 〇〇三〇王	表
							面
							側
							面
							現状
							写真
圖35	圖36	圖35			圖35		

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	番号
臺	臺	臺	臺	臺	臺	穴	形状
二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	高さ
二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	幅
二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	厚さ
覺善通智信士 接善連迎信女	先祖代々 春惠妙戒信女	先祖代々 梅繼清香信女	迎雲自接信士 先祖代々 梅繼清香信女	〇〇信 〇〇信信士	〇〇信 〇〇信信士	〇〇信 〇〇信信士	表
							面
							側
							面
							現状
							写真
							圖35

番号	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
形状							
高さ	四	三	三	三	三	三	三
幅	三	三	三	三	三	三	三
表	寛文元年辛丑年 殊書御月信女 七月十八日	天明拾三庚午年 専教院蓮善字善居士 十二月十七日	光善道成信士	文化三丙寅年 光善願通常心居士 六月二十二日	開善院修善道遊居士 光善院坐實誠心大師		
側		小野氏 (左面)	基宝六戊午年六月十六 (右面)	石馬平内堂立之	阿部勝文墓 (左面)	阿部勝文墓 (左面)	阿部伊勢母とあり
現状	上部欠			倒壊	倒壊		
写真	図36		図36	図36	図36	図36	図36

番号	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲
形状							
高さ	六	三	三	三	三	三	三
幅	三	三	三	三	三	三	三
表	光岳院弘善真心・北居士 自在院大善法印圓康大師	正徳三癸巳年 定願院蓮善交禪大師 四月朔日	享保五庚子年九月十五日 開善院眞善女 地藏尊彫刻	享保五庚子年 蓮光院匠善了山居士 九月十一日	享保十三戊申年 願本信譽眞一学居士靈位 八月十日	先善冠角心居士 光善秋月眞願信女 靈位	清善願明智白信士 信行院義觀禪智居士 六月二十八日
側	阿部八郎右衛門勝嗣 (裏面)	阿部八郎右衛門勝嗣 阿部阿部又□助佐治	施主男 勝嗣 施主男 佐治	(右面)	(左面)	元文三戊午年五月廿九日 (右面)	清宝曆七年三月二十二日 (左面)
現状				倒壊			剥落あり
写真	図36	図36	図36	図36	図36	図36	図37

⑤	④	③	②	①
高	高	高	高	高
三三	三三	三三	三三	三三
春辺理轉産子 (右面) 信安永六丁酉九月十六日	明和四丁亥十月朔日 重輝院現尊唯光姉 梅橋坊源重女 宝曆八戊寅正月(旧日)	覺明院正尊時休居士 光照院明尊貞鏡大姉	徹尊淨護居士 赫尊妙顯大姉	赫尊妙顯□女 講發行安信士 講尊妙白信女
延享二乙丑二月十五日	弘化二乙巳年五月十二日 俗名阿部弥太夫静和 光顯院は「過去帳」に弘化三年十二月七日と記してあり	自然石を利用	徹尊は「過去帳」に承應三年十月廿三日とあり 寶子孫	正面に梵字あり 延享四丙辰年三月廿一日 (左面) (右面)
表面剥落あり				り剥落あり り剥落あり り風化あり
図37	図37	図37	図37	図37

⑤	④	③	②	①
高	高	高	高	高
三三	三三	三三	三三	三三
極尊照領居士 安尊惣知信女	各室法種童女 生尊蓮住信士 寛尊全了信士	地蔵尊彫刻	一蓮 圓尊了教知領信士童 壹尊全教是種信女童	徹尊法親信士 各位 天尊妙冠信女
延享六戊午年七月廿五日 (左面) 元禄十六未十月九日 (右面) 享保十五戊八月五日	冬元禄五壬申十月五日 生享保五庚子十二月二日 (右面) 享保四己亥九月九日	元文三□□十月十三日 「過去帳」には幻術童女とあり (左面) 寛保式壬戌 十月二十九日 「過去帳」に為縁童女子とあり	宝曆六丙子九月朔日 壹尊は「過去帳」に明和九壬辰九月十日とあり (左面) 八衛門 墓 同妻 (右面)	察寛政六寅三月十四日 天安永二己癸己三月廿一日 (左面)
り剥落あり		剥落している		
図37	図37	図37	図37	図37

⑧	⑦	⑥	⑤	④	番号
					形状
六	三	六	六	六	高さ
三	三	三	三	三	幅
					厚さ
寛永廿年		眞善浄観大姉	安養寿堂正倫居士	？最善成覚信士 四月二十六日	銘 表 面
【過去帳】に寛永十癸酉					側 面
り風化あり 表面剥	倒壊				現状
図37					写真

X地区 新墓も多く、江戸時代の小型の角碑もかなり見受けられる。

④	③	②	①	⑤	番号
					形状
	六	六	六	六	高さ
	三	三	三	三	幅
					厚さ
					銘 表 面
					側 面
					現状
					写真



第9図 X地区

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号	
										形状	
型	型	型	型	型	型	型	型	型	型	高さ	大きい 幅厚さ
三二四	三二四	三二六	三二六	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	幅厚さ	
相妻秀貞衆人六 實菩提智理中居士 相妻秀貞衆人六										表	銘 面
相妻秀貞衆人六 實菩提智理中居士 相妻秀貞衆人六										面	
										側	文 面
										面	
										現状	写真
										写	

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号	
										形状	
元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	高さ	大きい 幅厚さ
二七三	二七三	三二六	三二六	三二六	三二六	三二六	三二六	三二六	三二六	幅厚さ	
正徳六丙子天 孝旭理芳童子 正月十八日										表	銘 面
正徳六丙子天 孝旭理芳童子 正月十八日										面	
										側	文 面
										面	
										現状	写真
他碑と重なっている 化表面風										写	

四三六

四三六

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
益	兎	凸	三	三	益	三	三
元 三	元 二	三 二	元 二	三 二	三 二	三 二	三 二
寶水五戊 子年正月八日	香智童女	安室貞輝僧女 金吾剛山居士 寿養貞善僧女 桃畑知源僧士 知光彌明僧女	實通相善僧士 歷知院藏持了然居士 慶屋妙善大姉	早世藤宮童女 享保八癸卯天正月廿一日	破山見外僧士 見毛貞性僧女	寶水三戊年 宅善貞現僧女 十一月七日	先祖代々諸靈 安屋貞因僧女
地蔵尊彫刻	知	文政三庚辰年八月廿九日 安 天保四癸巳年八月廿五日 (左面) 桃安政三卯年二月廿四日 (左面)	實寛政元西五月十四日 香舎童女明和三年二月二十四日 (左面) □明和元年十二月十八日 聲天明西己九月四日 (右面)	地蔵尊彫刻	慶応二丑年十月三日 【過去帳】は非でなく實とあり	文久三庚午十月十四日 (左面)	
上部欠				剥落			
38							
⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
							無縁塔
							西 (全高)
							三
							□律師有正不生位
							天和二戌年 【過去帳】に 二月三日とあり
							(左面)
							萬徳元 成 兼法清念僧女 十一日□□日
							□光□
							(自然石を利用)
							喜譽感光宗悅居士 蓋位 撰書幽光妙女大姉 十一月十三日
							延宝四丙辰年 (右面) 享保元丙申年十月十八日 (裏面) 施主任吉原加兵衛
							欠損
							剥落
							風化あり
							欠損
							上部をのこし埋っている
38							

Ⅺ地区 江戸時代でも、比較的古い三角頭角碑もあるが、倒壊しているものが多い。しかし、そのため、この形式の下底部には枘が突出し、基台の納穴にさしこんでいることもわかる。五輪塔四基もある。

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	側面	現状	写真
①	五輪塔	一七〇			(地の部分) 慶長十八癸丑年 高森院殿 壁書義山道鏡居士 九月十二日卒	(左面) 大須賀家建之 小笠原 姓名義頭墓 四方に梵字あり	風化	図38
②	五輪塔	一七二			(地の部分) 寛永八年辛未年 清森院 廣孝歿山善宗居士 三月十六日卒	(右面) 【過去帳】に小笠原惣 兵衛とあり 小笠原 實名清廣墓 四方に梵字あり	風化	図39
③	五輪塔	一四三			時寛永十六日己酉月□□ 先□□定尼□ 信女施主□□□□夜	四方に漢字で空風火水 地の刻文あり	風化	図39

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	側面	現状	写真
④	五輪塔	一四七	六三	三	年二月十三日	四方に梵字あり	風化及 び欠損	図39
⑤		一七〇	六三	三	年二月十三日		風化及 び剥落	図40
⑥		一〇〇	六三	三	年二月十三日		風化及 び剥落	図40
⑦		一〇〇	六三	三	年二月十三日		風化及 び剥落	図40
⑧		六三	六三	三	年二月十三日		風化及 び剥落	図40
⑨		六三	六三	三	年二月十三日		風化及 び剥落	図40



第10図 IX・Ⅺ地区



第11図 Ⅺ地区

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	裏	側	文	面	現状	写真
三	三	三	三	三	覚忠清澄信女 惣与三右衛門					欠損及 び剥落	
四	四	四	四	四	宝曆五年三月廿三日 □寛妙清信女 孝子多田源六立					欠損及 び剥落	
五	五	五	五	五	圓登光輪信士					剥落	図40
六	六	六	六	六	□応九壬辰年九月十二日 月岡淨宗信男 施主池田□通					剥落	図40
七	七	七	七	七	德氏梅橋人□					剥落	
八	八	八	八	八						剥落	
九	九	九	九	九						剥落	
十	十	十	十	十						剥落	
十一	十一	十一	十一	十一						剥落	
十二	十二	十二	十二	十二						剥落	
十三	十三	十三	十三	十三						剥落	
十四	十四	十四	十四	十四						剥落	
十五	十五	十五	十五	十五						剥落	
十六	十六	十六	十六	十六						剥落	
十七	十七	十七	十七	十七						剥落	
十八	十八	十八	十八	十八						剥落	
十九	十九	十九	十九	十九						剥落	
二十	二十	二十	二十	二十						剥落	
二十一	二十一	二十一	二十一	二十一						剥落	
二十二	二十二	二十二	二十二	二十二						剥落	
二十三	二十三	二十三	二十三	二十三						剥落	
二十四	二十四	二十四	二十四	二十四						剥落	
二十五	二十五	二十五	二十五	二十五						剥落	
二十六	二十六	二十六	二十六	二十六						剥落	
二十七	二十七	二十七	二十七	二十七						剥落	
二十八	二十八	二十八	二十八	二十八						剥落	
二十九	二十九	二十九	二十九	二十九						剥落	
三十	三十	三十	三十	三十						剥落	
三十一	三十一	三十一	三十一	三十一						剥落	
三十二	三十二	三十二	三十二	三十二						剥落	
三十三	三十三	三十三	三十三	三十三						剥落	
三十四	三十四	三十四	三十四	三十四						剥落	
三十五	三十五	三十五	三十五	三十五						剥落	
三十六	三十六	三十六	三十六	三十六						剥落	
三十七	三十七	三十七	三十七	三十七						剥落	
三十八	三十八	三十八	三十八	三十八						剥落	
三十九	三十九	三十九	三十九	三十九						剥落	
四十	四十	四十	四十	四十						剥落	

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	裏	側	文	面	現状	写真
一	一	一	一	一						剥れ風	
二	二	二	二	二						剥れ風	
三	三	三	三	三						剥れ風	
四	四	四	四	四						剥れ風	
五	五	五	五	五						剥れ風	
六	六	六	六	六						剥れ風	
七	七	七	七	七						剥れ風	
八	八	八	八	八						剥れ風	
九	九	九	九	九						剥れ風	
十	十	十	十	十						剥れ風	
十一	十一	十一	十一	十一						剥れ風	
十二	十二	十二	十二	十二						剥れ風	
十三	十三	十三	十三	十三						剥れ風	
十四	十四	十四	十四	十四						剥れ風	
十五	十五	十五	十五	十五						剥れ風	
十六	十六	十六	十六	十六						剥れ風	
十七	十七	十七	十七	十七						剥れ風	
十八	十八	十八	十八	十八						剥れ風	
十九	十九	十九	十九	十九						剥れ風	
二十	二十	二十	二十	二十						剥れ風	
二十一	二十一	二十一	二十一	二十一						剥れ風	
二十二	二十二	二十二	二十二	二十二						剥れ風	
二十三	二十三	二十三	二十三	二十三						剥れ風	
二十四	二十四	二十四	二十四	二十四						剥れ風	
二十五	二十五	二十五	二十五	二十五						剥れ風	
二十六	二十六	二十六	二十六	二十六						剥れ風	
二十七	二十七	二十七	二十七	二十七						剥れ風	
二十八	二十八	二十八	二十八	二十八						剥れ風	
二十九	二十九	二十九	二十九	二十九						剥れ風	
三十	三十	三十	三十	三十						剥れ風	
三十一	三十一	三十一	三十一	三十一						剥れ風	
三十二	三十二	三十二	三十二	三十二						剥れ風	
三十三	三十三	三十三	三十三	三十三						剥れ風	
三十四	三十四	三十四	三十四	三十四						剥れ風	
三十五	三十五	三十五	三十五	三十五						剥れ風	
三十六	三十六	三十六	三十六	三十六						剥れ風	
三十七	三十七	三十七	三十七	三十七						剥れ風	
三十八	三十八	三十八	三十八	三十八						剥れ風	
三十九	三十九	三十九	三十九	三十九						剥れ風	
四十	四十	四十	四十	四十						剥れ風	
四十一	四十一	四十一	四十一	四十一						剥れ風	
四十二	四十二	四十二	四十二	四十二						剥れ風	
四十三	四十三	四十三	四十三	四十三						剥れ風	
四十四	四十四	四十四	四十四	四十四						剥れ風	
四十五	四十五	四十五	四十五	四十五						剥れ風	
四十六	四十六	四十六	四十六	四十六						剥れ風	
四十七	四十七	四十七	四十七	四十七						剥れ風	
四十八	四十八	四十八	四十八	四十八						剥れ風	
四十九	四十九	四十九	四十九	四十九						剥れ風	
五十	五十	五十	五十	五十						剥れ風	
五十一	五十一	五十一	五十一	五十一						剥れ風	
五十二	五十二	五十二	五十二	五十二						剥れ風	
五十三	五十三	五十三	五十三	五十三						剥れ風	
五十四	五十四	五十四	五十四	五十四						剥れ風	
五十五	五十五	五十五	五十五	五十五						剥れ風	
五十六	五十六	五十六	五十六	五十六						剥れ風	
五十七	五十七	五十七	五十七	五十七						剥れ風	
五十八	五十八	五十八	五十八	五十八						剥れ風	
五十九	五十九	五十九	五十九	五十九						剥れ風	
六十	六十	六十	六十	六十						剥れ風	
六十一	六十一	六十一	六十一	六十一						剥れ風	
六十二	六十二	六十二	六十二	六十二						剥れ風	
六十三	六十三	六十三	六十三	六十三						剥れ風	
六十四	六十四	六十四	六十四	六十四						剥れ風	
六十五	六十五	六十五	六十五	六十五						剥れ風	
六十六	六十六	六十六	六十六	六十六						剥れ風	
六十七	六十七	六十七	六十七	六十七						剥れ風	
六十八	六十八	六十八	六十八	六十八						剥れ風	
六十九	六十九	六十九	六十九	六十九						剥れ風	
七十	七十	七十	七十	七十						剥れ風	
七十一	七十一	七十一	七十一	七十一						剥れ風	
七十二	七十二	七十二	七十二	七十二						剥れ風	
七十三	七十三	七十三	七十三	七十三						剥れ風	
七十四	七十四	七十四	七十四	七十四						剥れ風	
七十五	七十五	七十五	七十五	七十五						剥れ風	
七十六	七十六	七十六	七十六	七十六						剥れ風	
七十七	七十七	七十七	七十七	七十七						剥れ風	
七十八	七十八	七十八	七十八	七十八						剥れ風	
七十九	七十九	七十九	七十九	七十九						剥れ風	
八十	八十	八十	八十	八十						剥れ風	
八十一	八十一	八十一	八十一	八十一						剥れ風	
八十二	八十二	八十二	八十二	八十二						剥れ風	
八十三	八十三	八十三	八十三	八十三						剥れ風	
八十四	八十四	八十四	八十四	八十四						剥れ風	
八十五	八十五	八十五	八十五	八十五						剥れ風	
八十六	八十六	八十六	八十六	八十六						剥れ風	
八十七	八十七	八十七	八十七	八十七						剥れ風	
八十八	八十八	八十八	八十八	八十八						剥れ風	
八十九	八十九	八十九	八十九	八十九						剥れ風	
九十	九十	九十	九十	九十						剥れ風	
九十一	九十一	九十一	九十一	九十一						剥れ風	
九十二	九十二	九十二	九十二	九十二						剥れ風	
九十三	九十三	九十三	九十三	九十三						剥れ風	
九十四	九十四	九十四	九十四	九十四						剥れ風	
九十五	九十五	九十五	九十五	九十五						剥れ風	
九十六	九十六	九十六	九十六	九十六						剥れ風	
九十七	九十七	九十七	九十七	九十七						剥れ風	
九十八	九十八	九十八	九十八	九十八						剥れ風	
九十九	九十九	九十九	九十九	九十九						剥れ風	
百	百	百	百	百						剥れ風	

刈地区 新墓も多いが、江戸時代の小型の角碑が多数存する。

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
								形状
								高さ
								幅
								厚さ
								表面
								側面
								現状
								写真

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
								形状
								高さ
								幅
								厚さ
								表面
								側面
								現状
								写真



第12図 刈地区

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
空	三	空	空	三	三	三
明發成月晴光居士	寬譽圓祥春明居士 圓譽純智照大姉	性喜山實安淨信士 安譽拓光貞心清信女	和道円上座 風譽蓮高信女阿室 享保六年八月十一日 起雪親子	然譽廟歌信士 院生位 鏡譽淨悅信女	才譽淨忠信士 澄譽妙岸信女 春譽良全隆道信士 良譽妙涼貞道信女 春譽梅春信女 春譽妙林信女	釋氏淨円 乘定蓮勝信士 同達 夏賦貞求信女
(左西)	(左西) 天明五年二月二日 安永三年十二月十七日	(左西) 元文五歲 申年十月六日 安譽は「過去帳」に宝曆 元永十一月廿日とあり	(左西) 元禄十四年巳年十二月廿日 り 寶曆十二年六月十九日	(左西) 享保三丙寅六月廿九日 (右西) 寶曆十二年六月十九日	(左西) 天保五年十一月十七日 文政十一年十月四日 明治十九年三月三日 明治三十年五月廿一日 明治二十八年二月三日 明治三十三年二月十四日 (右西) 松下孫吉 建之	
			剝落也	剝落也		四41

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
空	三	空	三	三	三	三
信教院發誓心居士 靈位	正徳二年庚申 十一月十二日	風譽重應居士 覺位	常誓口道信士	正譽致明信士 惠譽樹光信女	(剝落部) 禪定尼靈位	滿月童子寛政十一未四月十六日 英口童子享和四子正月十日 穂夢童子文政三辰口月十日
正徳二年庚申 靈位	十一月十二日	覺位				詳譽妙光貞安大姉 位
欠損	剝落	(左西) 大正二年九月廿六日建	(左西) 安政五年年十二月廿六日 (右西) 明治七年五月十一日	(剝落部) 庚申年 上郡欠	(左西) 明治四年未十月廿二日 (右西) 嘉永元戊申年八月十二日	神譽連理妙光大姉 文政七甲八月十五日 (右西) 寛政十一未四月十九日 (左西) 天保十一庚子年七月九日 長譽は「過去帳」に嘉永 三庚戌六月四日とあり
		福田氏仁右衛友武之塔 室永乙酉年				

①	番 号	形 状	大いさ	表	銘	面	側	文	面	現 状	写 真
			高さ							崩壊し 2つに分か れている	
			幅厚さ								
				表	銘	面	側	文	面		
				寛文二年□月九日 (正西) 清月妙跡信女 大塚□墓施王野盛券 太輔娘 太輔娘							

②	番 号	形 状	大いさ	表	銘	面	側	文	面	現 状	写 真
			高さ							倒れ風 化	
			幅厚さ							上彫欠	
				表	銘	面	側	文	面		
				寛文九十四年十二月朔日 月依道白信士 施主							

Ⅺ地区 参道に向って左がわにある。この地区の特色は、四基の大型の五輪塔のあることで、やや奥まったところに、天正十二年四月九日長久手で討死した小笠原半五郎(氏信)の五輪塔が、劍徳院刃替雄山長久居士の戒名を地輪部と刻して立ち、この向って左には、文禄二年九月十八日死んだ小笠原所左衛門茂次の五輪塔が、養寿院那替無聖茂繁居士の戒名を刻して立つ。その他、寛永八年(一六三一)に死去した小笠原惣兵衛尉清広、慶長十八年(一六一三)に死去した小笠原右京進義頼の五輪塔もある。ほかに承應三年(一六五四)の露光秋光童子銘の三角尖頭枚状碑をはじめ江戸時代初期のものも多い。



第13回 Ⅺ地区

③	番 号	形 状	大いさ	表	銘	面	側	文	面	現 状	写 真
			高さ								
			幅厚さ								
				表	銘	面	側	文	面		
				寛政十年十月廿七日 於普重子は「過去帳」に 明和九五既六月十八日とあり (左側) 弘化二乙巳年六月十日							

④	番 号	形 状	大いさ	表	銘	面	側	文	面	現 状	写 真
			高さ								
			幅厚さ								
				表	銘	面	側	文	面		
				寛政四年九月二十九日 (左側) 寛永水一酉九月廿一日 顯明治一巳五月九日 寛政十五五月十四日 (右側)							

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	番号
									形状
									高さ
									幅
									厚さ
									表面
									側面
									現状
									写真

⑬ 高さ 大い
 ⑭ 高さ 大い
 ⑮ 高さ 大い
 ⑯ 高さ 大い
 ⑰ 高さ 大い
 ⑱ 高さ 大い
 ⑲ 高さ 大い
 ⑳ 高さ 大い
 ㉑ 高さ 大い

⑬ 表面 蕨若石右衛門
 ⑭ 表面 蕨若石右衛門
 ⑮ 表面 蕨若石右衛門
 ⑯ 表面 蕨若石右衛門
 ⑰ 表面 蕨若石右衛門
 ⑱ 表面 蕨若石右衛門
 ⑲ 表面 蕨若石右衛門
 ⑳ 表面 蕨若石右衛門
 ㉑ 表面 蕨若石右衛門

⑬ 側面 (左面)
 ⑭ 側面 (左面)
 ⑮ 側面 (左面)
 ⑯ 側面 (左面)
 ⑰ 側面 (左面)
 ⑱ 側面 (左面)
 ⑲ 側面 (左面)
 ⑳ 側面 (左面)
 ㉑ 側面 (左面)

⑬ 現状 一部剝
 ⑭ 現状 一部剝
 ⑮ 現状 一部剝
 ⑯ 現状 一部剝
 ⑰ 現状 一部剝
 ⑱ 現状 一部剝
 ⑲ 現状 一部剝
 ⑳ 現状 一部剝
 ㉑ 現状 一部剝

⑬ 写真 図43
 ⑭ 写真 図43
 ⑮ 写真 図43
 ⑯ 写真 図43
 ⑰ 写真 図43
 ⑱ 写真 図43
 ⑲ 写真 図43
 ⑳ 写真 図43
 ㉑ 写真 図43

㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	番号
									形状
									高さ
									幅
									厚さ
									表面
									側面
									現状
									写真

㉒ 高さ 大い
 ㉓ 高さ 大い
 ㉔ 高さ 大い
 ㉕ 高さ 大い
 ㉖ 高さ 大い
 ㉗ 高さ 大い
 ㉘ 高さ 大い
 ㉙ 高さ 大い
 ㉚ 高さ 大い

㉒ 表面 蕨若石右衛門
 ㉓ 表面 蕨若石右衛門
 ㉔ 表面 蕨若石右衛門
 ㉕ 表面 蕨若石右衛門
 ㉖ 表面 蕨若石右衛門
 ㉗ 表面 蕨若石右衛門
 ㉘ 表面 蕨若石右衛門
 ㉙ 表面 蕨若石右衛門
 ㉚ 表面 蕨若石右衛門

㉒ 側面 (左面)
 ㉓ 側面 (左面)
 ㉔ 側面 (左面)
 ㉕ 側面 (左面)
 ㉖ 側面 (左面)
 ㉗ 側面 (左面)
 ㉘ 側面 (左面)
 ㉙ 側面 (左面)
 ㉚ 側面 (左面)

㉒ 現状 一部剝
 ㉓ 現状 一部剝
 ㉔ 現状 一部剝
 ㉕ 現状 一部剝
 ㉖ 現状 一部剝
 ㉗ 現状 一部剝
 ㉘ 現状 一部剝
 ㉙ 現状 一部剝
 ㉚ 現状 一部剝

㉒ 写真 図43
 ㉓ 写真 図43
 ㉔ 写真 図43
 ㉕ 写真 図43
 ㉖ 写真 図43
 ㉗ 写真 図43
 ㉘ 写真 図43
 ㉙ 写真 図43
 ㉚ 写真 図43

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
益	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
徳本浄覚居士							清譽理清女	慶安四年卯年九月一日 西條道雪禪定門 施主田中源左衛門
								(正面) 神年 神年 神年 (裏面) 神年 神年
								(左面) 神年 神年 神年 (右面) 神年 神年
寛文十二年壬子年正月九日							寛文十三癸丑五月廿二日 施主松本源五左衛門	
剝落大	損大	倒れ風 化、欠	損大	倒れ風 化、欠	倒れ下 部欠損	倒れ風 化	剝落大 上部欠	倒れ
⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
益	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
明治五年 三月朔日 花雲堂女	元和九〇〇〇〇信士		一登道也居士	得真報蒙了閣禪定門靈位 九月廿三日	万治二年	萬治三年 得真春覺光妙意禪定門靈位 安三月十日		南無阿弥陀仏〇〇〇〇
								施主 鈴木太郎
								(右面)
倒れ	風化	しい 化が激	損、風	上半欠	倒れ	風化	上部欠	倒れ風

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
								形状
六	六	六	六	六	六	六	六	高さ
三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	幅厚さ
享保十乙巳年 浄善清口到岸大船雲位 十一月十七日	享保十乙巳年 圓禄十一戊寅 光全院准誓一斎居士 十二月十五日	享和三亥年 葵光秀林童子 霜月九日	天保四癸巳年 朗月詠笑貞吟童女 十一月八日	天保四癸巳年 法月貞樹童女 十一月八日	天保四癸巳年 十一月八日	享保十二丁未年 常誓脚眞智大姉 十一月初五日	浄屋耶心信士 雲月了照浄信士 雲位 享保元酉九月五日	表面
施主 町野氏 『浄去儀』には 清原院浄善雪光到岸大 船とあり	(右面)	(右面)	町野文右衛門應次二男 俗名 町野文吉	(左面)	町野紋左衛門廣次 三女	寛保元酉九月五日	延享三寅六月十三日 (右面)	側面
						欠損		現状
								写真
								図45

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	番号
								形状
三	六	三	三	三	三	三	三	高さ
三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	幅厚さ
天保十四癸卯年 堀現良美童子	寛政四壬子年 龜光院院通室明秋大姉 九月初三日	寛政二戌年 龜月惠鏡夢善童子 二月初日	寛政二戌年 容好院正相妙殊大姉	仁母院義善礼智一言居士 仁光院礼智智眞信敬大姉	仁母院義善礼智一言居士 仁光院礼智智眞信敬大姉	順義院洗淨社清誓一水居士 寛光院白誓明福大姉	享保十六辛丑年 龜直院精誓一起浄進居士 二月十五日	表面
義父町野紋左衛門隆次 町野虎吉恵次妻 (左面)	(右面)	(右面)	(左面)	(左面)	(左面)	(左面)	俗名町野友右衛門次次盛 明和二酉年九月六日 (右面) 寛安永四乙未年十月廿八日 英次後妻	側面
								現状
								写真
								図45

④	③	②	①
壹	貳	參	肆
三三	三三	三三	三三
寂 寂真院静岳實應居士 樂智院最善自應大姉 (左面) 宣稱十二歲壬午十一月廿六日卒 葬武州江戸麹町心法寺 先福三河原俗名 鳥居弥市左衛門景寬	貳 二二 〇院櫻〇誓了〇 〇誓知〇 (左面) 『過去帳』に三月十一日 表面風 として奉寧院香誓知白 大姉とあり 宝曆十曆辰三月 『過去帳』に享保元丙申 十一月十一日に徳院院誓 了寂居士とあり (右面) 〇三河俗名 鳥居〇市〇門 生園駿河田中〇治墓	三 三三 純明院通善錦秋廣園居士 松山院廣登寿永貞信大姉 (左面) 俗名町野杖左衛門康次藤 弘化三丙午年六月十五日 (右面) 弘化四丁未年五月十八日 康次妻	四 三三 日新院孝善行全一遺居士 長寿院繁善昌榮保大姉 (左面) 俗名町野文右衛門憲次藤 文政六癸未年八月十五日 (右面) 弘化三丙午年六月九日 憲次後妻
四45			

④	③	②	①
壹	貳	參	肆
三三	三三	三三	三三
寂 寂安院助善忠覺大姉 享保〇〇年正月〇三日 (右面) 本國三河 俗名鳥居儀右門景富碑 生園常三島	貳 三三 享保六年壬丑二月六日 還本清岳浄感信立位 地蔵尊彫刻	三 三三 元嶺岸快山信士 元禄十三庚戌年五月廿八日 地蔵尊彫刻	四 三三 崇善院徳善興仁居士 羅光院寿善榮秀大姉 (左面) 崇文政元及寅年十一月三日 俗名 鳥居弥一兵衛景明 景光院は『過去帳』に 安政二乙卯十一月三日 とあり 兼共妻
四45			

④	③	②	①	番号
				形状
品	二三	二尺	品	高さ
興六	興三	品二八	三元三	幅厚さ
寛永十六己卯年三月九日 龜紗祐禪定尼 吉見六左衛門尉 内室 南無阿弥陀佛 往講般若淨願堂 吉見六〇〇 寛文五年己巳 施〇般若淨感信十〇〇 正月廿日傍名〇〇見六左衛門 疑位				銘 表 面
				側 面
剥落		風化が 激しい	上部欠	現状
				写真

⑧	⑦	⑥	⑤	番号
	無縫塔			形状
穴	三	二		高さ
若三	三	二		幅厚さ
宝曆七丁丑天 寺到春月臨好關善女 西山 開基 崇寧 上人				銘 表 面
町野氏 (左面)				側 面
		風化	倒壊	現状
				写真

⑧	番号
	形状
七	高さ
三三	幅厚さ
三六	銘 表 面
浄安玄清禪定門 本覚了道禪定尼	
	側 面
	現状
	写真

XV地区 参道の左わきに東西に長く、参道に面して存する。江戸時代でも、貞享・宝永年の紀年銘のある比較的古いものが多い。



第15図 XV地区

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
四	四	四	五	天	四	三	三	四
二七九	三三四	三三	二二六	二二七	二二三	二二二	二二一	二二〇
超賢院本覺常通居士 十一月廿九日	享保十三戊申歲 淨心院印住是念居士靈位 三月十三日	享保四己亥五月廿一日	地蔵尊彫刻 地蔵尊彫刻 「過去帳」に 撤山童子とあり	元文四己未年 國仁院蓮華張務居士 六月朔日	寛保壬戌年 種興院明誓貞顯大師 九月二日	雲光幻樓童女 寛保三癸亥五月廿七日	地蔵尊彫刻	七月十四日 寛延三庚午六月十六日 顯教院住持宗俊居士 深松院梅真師大師 元文二丁巳十二月十七日
				(左面) 俗名 大塚儀兵衛貞貞 行年七十七				(右面) 俗名 町野宗俊
			上座欠 損	剥落				
四46		四46						

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
天		卷		愚	愚	三	三	三
二七三		二六六	二六六	二六一	二六〇	二五九	二五八	二五七
瑞光院明誓貞清大師		法性院顯覺大通師居士 佛光院天譽冠中大師		雷峯秀白信女	見生知微童子 佛知 童女 知靈 童女 地蔵尊彫刻付き	宝永四丁亥年 愈了淨院安譽不釋居士 七月廿二日	貞享丙寅年 愈探誓高岸覺吾居士 正月初五日	「過去帳」には高岸院 深誓覺善大師とあり
		(左面) 文政十二己丑年八月廿一日 福田喜兵衛		(右面) 天明二寅十二月十二日 中田喜作妻				
		文政三庚辰年六月十三日 福田氏友傳妻 美原						
		台座のみ		削壞 剥落				
四46		四46		四46		四46	四46	四46

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表面	側面	現状
⑤	五	三	三	三	顯光院造普功善居士	(左側) 天保十四年正月五日 源友信妻 仲	現狀
⑥	五	三	三	三	顯光院造普功善居士	(左側) 天保四癸巳年三月十一日 俗名福田依成女延	現狀
⑦	五	三	三	三	顯光院造普功善居士	(左側) 文政十三庚寅年七月初五日 福田氏	現狀
⑧	五	三	三	三	顯光院造普功善居士	(左側) 文久三癸亥年七月二十日 福田氏女義妻	現狀
⑨	六	三	三	三	正法院造願信士	(左側) 法天保九戊戌十月十一日 善文政元戊寅八月二日	現狀
⑩	六	三	三	三	正法院造願信士	(右側) 文久三癸亥七月廿日 施主 登□	現狀
⑪	五	三	三	三	佛徳院造普功善居士	(左側) 明治元年戊辰九月廿一日 (右側) 谷源之丞精用	現狀

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表面	側面	現状
⑫	六	三	三	三	光臨院造普員影大師	(左側) 宝曆十二壬午四月上五日 (右側) 谷源之丞精用	現狀
⑬	六	三	三	三	圓圓院造普慶居士	(左側) 明和三丙戌年六月十九日 (右側) 俗名谷源兵衛(剝落)	剝落
⑭	六	三	三	三	諸般院造普行團(剝落)	(左側) 【過去帳】には諸般院造 普行兼悦庵居士とあり 清 宝曆三癸酉年六月六日 【過去帳】には顯耀院淨 養清親妙悦大師とあり 顯 宝曆十一年巳年六月十二日 (右側) 俗名谷源之丞(剝落) 同妻	剝落
⑮	六	三	三	三	顯耀院淨養清親(剝落)	(左側) 宝曆七丁丑歳 (右側) 六月七日	剝落
⑯	六	三	三	三	要光院造普芳心大師	(左側) 宝曆七丁丑歳 (右側) 六月七日	剝落
⑰	六	三	三	三	馬亨四丁卯年 普顯院明普權光大師	剝落	現狀

①	番 号		
	形 状		
	大いさ	高さ	雲
	幅厚さ		三三
	表 面	銘 面	
	天保七丙申年八月十三日 現光院在警智道居士 浄智院光普明映大師 天保九戊戌年三月廿日		
	側 面	文 面	
	(左面) 俗名 町野嘉左衛門延次 (右面) 延次妻		
	現 状		
	写 真	図47	

②	番 号		
	形 状		
	大いさ	高さ	雲
	幅厚さ		三三
	表 面	銘 面	
	寿心院林喜真光大師		
	側 面	文 面	
	(左面) 天保五年戊辰七月三日 (右面) 町野嘉左衛門延次妻		
	現 状		
	写 真		



第16圖 XVI地区

XVI地区 参道に面して細長い東西の地区にある。天保・宝永前後の角碑が多いが、登った奥の一区画内に七基の墓標が北面して並列している。元禄十六年(一六一一)の紀年銘のある三角頭板状碑のような一群もある。また18は位牌形の形式を伝えており、多くの墓標の中でも特殊である。

③	④	⑤	
		三	六
		三三	元八
		□保二丁百年 獻實相院念普道尊居士 正月初三日	
			地蔵尊彫刻
		欠損が	欠
		激しい	
		欠損	

⑥	⑦	⑧	
		三	六
		三三	元二
		光顯影夢童子 直賢院□山實道居士 街谷貫道源純信士	
			(左面) 俗名 幕永中良右衛門義雄 (右面) 俗名 幕永中良右衛門義文
			割落
		欠損	

番号	形状	高さ	幅厚さ	表	裏	現状	写真
⑧	六角	二七	二七	桃園院發誓願團信士 理想院最誓抄勝大姉 誠院院高誓儀願信士	桃園院發誓願團信士 理想院最誓抄勝大姉 誠院院高誓儀願信士	(左面) 桃 安政六巳未年正月八日 理 弘化四丁未年正月廿九日 誠 明治十丁丑年八月廿三日	
④	六角	二六	二六	理想院最誓抄勝大姉	理想院最誓抄勝大姉	(左面) 弘化四丁未歲 正月廿九日 町野某室墓 (右面) 掛川藩 小崎門三郎拾成 建石	
⑤	六角	二七	二七	寛保二壬戌六月六日 即生院發誓直住居士 龜花生院發誓直住大姉 宝曆九巳卯天四月十一日	寛保二壬戌六月六日 即生院發誓直住居士 龜花生院發誓直住大姉 宝曆九巳卯天四月十一日		④47
⑥	六角	二六	二六	元文二丁巳年 飛梅院釋誓覺光取次大姉 壬子月十三日	元文二丁巳年 飛梅院釋誓覺光取次大姉 壬子月十三日	(右面) 文久二壬戌年四月十七日 次興妻	
⑦	六角	二五	二五	順誓西住信士 春法住安信士	順誓西住信士 春法住安信士	(左面) 元禄十六癸未年六月晦日 俗名町野仁兵衛權定 (右面) 俗名町野六左衛門信次 天保三壬辰年正月十日	

番号	形状	高さ	幅厚さ	表	裏	現状	写真
⑨	六角	三三	三三	〔剝離〕 往信士	〔剝離〕 往信士	(左面) 延宝五丁巳年 俗名 九月八日山口平兵衛	
⑩	六角	二六	二六	嘉永三庚戌年 了院水誓口貞大姉 八月十八日	嘉永三庚戌年 了院水誓口貞大姉 八月十八日	(左面) 江村氏仲墓	
⑪	六角	二六	二六	〔剝落〕 信士 鳥居四郎兵衛	〔剝落〕 信士 鳥居四郎兵衛		⑩47
⑫	六角	二六	二六	文化元子 皆令院得誓 十一月二日	文化元子 皆令院得誓 十一月二日	(右面)〔剝落〕 俗名 〔剝落〕 〔過去帳〕に神山又兵衛 勝孝とあり 〔過去帳〕には皆令院得 誓直住居士とあり	
⑬	六角	二六	二六	文化十三丙子年 皆令院令誓満足大姉 六月初日	文化十三丙子年 皆令院令誓満足大姉 六月初日	(左面) 土屋相模守殿家中 本間吉左衛門女 (右面) 神山又兵衛勝孝妻	
⑭	六角	二六	二六	開徳院法誓性善原土 味休院通誓寿徳原土 念光院称誓法寿大姉 藏誓真岸到運信士	開徳院法誓性善原土 味休院通誓寿徳原土 念光院称誓法寿大姉 藏誓真岸到運信士	(左面) 生國武州川越 元禄六癸酉年十月廿四日 神山氏重勝石塔	⑬47

⑤	④	③	②	①
益	益	益	益	益
三三	三三	三三	三三	三三
普照院燃香正願大師	慶応元年 康徳院行香之護曆士 八月廿六日	慶応二丙寅年 重隆院燃香抄御大師 七月四日 隨願童女		
二代神山又兵衛嫡子生 因通州棟須賀 享保七己卯年主三月九日 神山藤九郎隆和墓 (右面) 生因遠州棟須賀 神山又兵衛勝喜 生因同州日坂戸塚□□殿 『過去帳』に味休院は實 曆十三癸未六月十日神山 又兵衛養父並侍とあり 念光院は實曆十一己酉十月廿日 載香は享保二十己卯壬三月 月九日とあり	(右面) 堀口善六殿 俗名 茂勢 (左面) □男 子年□□二日	(右面) 神山又兵衛長男 俗名 神山桑吉勝成 廿九歳 (右面) 神山又兵衛妻□妻 享年五六枚	損	上那欠
倒壊	欠損が 激しい 割落あ り	四47		

⑤	④	③	②	①
益	益	益	益	益
三三	三三	三三	三三	三三
清心院燃香良願真光大姉	元禄十六癸未年 浄住院燃香宝殿 常居士 正月廿五日	宝永三丙戌歳 即覚院燃香玄垂居士 九月十九日	法心院得悟勇哉居士 蓮心院抄悟善哉大師	
清心院燃香良願真光大姉 享保三庚午歳二月二十四日 源屋代吉徳号了翁 千時六十有四歳 同人後妻慈心尼 (右面) 明治己春君候被封印地千時州時 父病罹奉不能 共葬徒乃□護榮寺借偶一室以有 護父病□庚午春病 益加二月二十四日竟不起而卒於 是奉父□并当山先 榮之次母日香徒行死千時州且□ □合□干並乃乞得 明治三庚午歳三月二十八日 房州花柳堀屋□男島吉孝衛	(左面) 崩壊 欠落 源考常轟土補之生 屋代善八吉長	(左面) 崩壊 欠落 屋代□右衛門善昌 千時五十有八歳 甲州武田家臣馬□美濃守信房 玄保奥州白川之産 明治三庚午歳三月吉享再□之 (左面) 屋代己心吉介 天保三壬辰年三月晦日		

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	裏	文	現状	写真		
②	②	②	②	②	天保七丙申年 常開院法真現大姉 正月十八日	元禄三庚午年 (欠損) 元禄三庚午年 心僧土堂位	元禄元戊辰年 常開院法真現大姉 十一月三日	元禄十丁丑年 常開院法真現大姉 十月朔日	(左面) 歴代佐右衛門吉徳妻	上面欠 損	④7

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表	裏	文	現状	写真		
②	②	②	②	②	元文丁巳年三月十日 了達院根替一住善入僧士 蓮光院昌誓願築大姉 享保十六辛未年九月十六日	宝曆七丁丑年七月廿五日 亮音院修善貞休居士 臨心院益善休居士	大姉寛政四年 大姉寛政十一年 大姉寛政三年 大姉寛政八年	(風化) 居十口年 大姉寛政四年 大姉寛政十一年 大姉寛政三年 大姉寛政八年	「過去帳」には品書でなく 「勘定」とあり 「過去帳」には称書でなく 「勘定」とあり	剥落	④7

ⅩⅦ地区 墓地の最も奥の地区にあるものであり、東の崖に近い。墓地の区画としては、新しく設けられたようである。したがって新墓も多く、また先祖代々の墓も多い。この地区には、自然石による一種の配石遺構のものや自然石の墓石などもある。

しかし、寛文・延宝・元和の年号を刻し、古い形式の三角頭類のものを復原して、追善供養した墓標もあり、ほかに自然石による神職にあった人の墓標も見られる。なお、この地区は「百姓墓」ともいわれており、土地の当時の百姓の墓地であったという。



第17回 ⅩⅦ地区

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
							形状
壺	壺	罍	罍	罍	罍	罍	高さ
三二七	三二二	三二〇	三二〇	三二六	三二六	三二六	幅厚さ
菅原光信女 先代々々精進 正奉宣光信	菅原成願聖道信士 観誓光顯立音信女 観誓成本賢順信士 菅原智本妙音信女	菅原明山信士 合掌珠光信女 菅原敏道信士	松原貞亮信女 観誓重現信士 大塚秋覚信士	功誓徳永信女	徳安浄道信士 菅原童女 香願童女	惠美童女 先代々々諸精進	精誓勇進信士 勇誓様進信女 原誓大然信士 大善悟然信女
							表面
							側面
							文面
							現状
							写真

図48

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
										形状
										高さ
										幅厚さ
罍	罍	罍	罍	罍	罍	罍	罍	罍	罍	罍
三二六	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二
教宣童子 山誓貞蔵信女	天誓祐光信女	大供智海尼上座	菅原密定信士	有縁無縁等	観誓浄智信男	成光道本善女	保榮淨牙和尚	先代々々悉会得脱信士 久安貞美信女	廣匠慈門信士	廣匠冬替順枯信女
										表面
										側面
										文面
										現状
										写真

図48

図48

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
								形状
高	高	三	高	高	高	高	高	高さ
二	三	二	二	二	二	二	二	幅
四	三	二	二	二	二	二	二	厚さ
宗登原道信士	至善行道信士 至□成道信士古運禪定門 先祖代々一家精堂秋日信女 唯願意説信士日了童子	真懿重女墓	明登照雲信士 照登貞雲信女	觀心信十原保十三申二月廿八日 念道信士□元申五月十四日 先祖代々精堂 淳夢清□信女□三亥六月十一日 是心相□信士□永□九月十三日	完善意性信女 寛政五正月三日	天明八申六月十日 意善兜性信士	明登明雲信士 明登□月信女	銘 表面
(右面)	天候六乙未歲閏七月十三日	(右面)	文久二年戊八月十八日 (右面)	高門市郎兵衛 「過去帳」に原登は慶応 元八月十八日とあり				側 文 面
								現状
								写真

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
								形状
高	高	高	高	高	高	高	高	高さ
二	二	二	二	二	二	二	二	幅
四	三	二	二	二	二	二	二	厚さ
通善妙性信女納可童子	常善可善信士原月露交信女 先祖代々精堂	高登秋岸智道信士 高登妙秋貞道信女	松登汝願信士 寿登貞願信女	南登智高信士	清幼童子 春治童子 広田童子 寿保童子	慶登實言志誠信士 實登貞誠信女	高登貞尚信女	銘 表面
「過去帳」には眞善露交 信女とあり	常安水二巳五月七日 通和元申十二月三日 (右面)	高明治十八年八月廿二日 高文久三年九月十二日 (左面)	天保四癸巳歲□月廿三日 「過去帳」に壽登は天保 七丙申六月廿六日とあり	(右面)	安政二乙卯年八月朔日 「過去帳」に南登は明治 四未九月十日とあり	慶応四辰四月十三日 俗名 土屋文右衛門	嘉永元申十月廿五日 「過去帳」に宗登は實屋 元五月朔日とあり	側 文 面
								現状
								写真

④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬							
品	品	品	品	品	品	品	品	品	品							
二七	二六	二五	二三	二三	二二	二一	二〇	一九	一八							
光室如秋信女 東菩提燈信士堂	關善妙光信女 關善妙光信女	法喜是證信女 法喜是證信女	圓善智覺信士 圓善智覺信士	演善是教信士堂 演善是教信士堂	寂誓了圓信士 寂誓了圓信士	道岩空全庵主合位 道岩空全庵主合位	演善妙法信女 演善妙法信女	享菩提元信士 享菩提元信士	利善貞林信女 利善貞林信女	但誓受業信士 但誓受業信士	正善貞覺信女 正善貞覺信女	自然石を利用 自然石を利用	自然石を利用 自然石を利用	自然石を利用 自然石を利用	真善露交信女 真善露交信女	洵性重女 洵性重女
																直寛政六寅三月〇日 橋天明五巳二月八日 『過去帳』には天明四年 既一月八日とあり

図45

⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔						
品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品						
二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五						
春誓嗣本信女 光屋脚英信女一合	心屋林正信士 心屋林正信士	先祖代々精堂 春相抄現信女	現善西翁信士 現善西翁信士	先祖代々精堂 春相抄現信女	清善浄雲法子 清善浄雲法子	黄光妙雲信女 黄光妙雲信女	万岳良秋信士 万岳良秋信士	堆銀妙光信女 堆銀妙光信女	即覺貞生信女 即覺貞生信女	先祖代々諸精等 先祖代々諸精等	即善得生信士 即善得生信士	運善妙輝信女 運善妙輝信女	即善選道信士 即善選道信士	淨善清口信士 淨善清口信士	到善浄生信女 到善浄生信女	到天保二辛卯年八月十三日 (左面) 文久四子年七月廿六日 (左面)
																往文政辰歲七月十一日 『過去帳』には天保三壬 辰十一月六日とあり (左面) 安政六未十月廿二日 (右面) 文政九戌七月廿五日 (右面) 自然石を利用 自然石を利用 自然石を利用 (左面) 天明四辰八月十七日 (右面) 明和四寅正月二十六日 (左面) 心文化五辰六月十七日 光寛政十年十月十三日 (右面) 春文政五年正月十七日

図46

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表面	側面	現状	写真
⑩	圓	二三	二三	二三	照登源通信士 法登貞通信女	(左面) 弘化四丁未年九月十六日 「過去帳」に法登は文久 三庚辰八月十日他遷降院 とあり		
⑨	圓	二三	二三	二三	本登源通信士 蓮月妙花信女	(左面) 明治九年七月四日		
⑧	圓	二三	二三	二三	施主 晴兼良雲信士 筆子中	(右面) 天保十己亥歲八月六日	剥落	
⑦	圓	二三	二三	二三	莊學妙眞信女 或本學眞成信士位 普光明庵信女			
⑥	圓	二三	二三	二三	淨學妙清信女夏學淨晴信士 地家先祖代々有縁無縁志精堂 妙眞信女長壽保信女			
⑤	圓	二三	二三	二三	圓學成口信士 成學妙圓信女 松壽清光信士 秋學妙清信女	(左面) 嘉永三年十二月十二日 安政五年八月十一日 (右面) 明治廿一年六月二日 文久二年九月九日		
④	圓	二三	二三	二三	或教善信女 二月廿九日	自然石を利用		

番号	形状	高さ	幅	厚さ	表面	側面	現状	写真
⑬	圓	二三	二三	二三	安爾七丁丑四月二十六日 開住遠傳信士 水月清徳信尼 寛延三庚午六月五日			
⑫	圓	二三	二三	二三	大譽空山信士 南無阿弥陀佛 空學慧口信士	(右面) 空文化十一甲戌年 霜月□九日		
⑪	圓	二三	二三	二三	享和二壬戌年 或淨蓮信士 四月廿二日			
⑩	圓	二三	二三	二三	圓月秋光信士 幽岳玄明信士 光學妙眞信女	(左面) 圓弘化三丙午九月十五日 南安政五年十一月六日 (右面) 明治三十年四月廿一日		
⑨	圓	二三	二三	二三	本登源信士 或芳登妙蓮信女	(右面) 天明四甲辰二月十七日		
⑧	圓	二三	二三	二三	安學淨供信士 普學寂心信士	(左面) 安天保壬辰年七月廿日 (右面) 普文政十丁亥十一月十八日		
⑦	圓	二三	二三	二三	早保十四己酉二月十七日 早世八宗兼子口位	地蔵尊の彫刻		
⑥	圓	二三	二三	二三	享保四己亥 明學光眞貞珠信女 八月廿七日	(右面) 施主兼田氏		

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
三二四	三二六	三二四	三二六	三二二	三二四	三二四
春響花月信女 葦華咲天信女 秋田淑月信女	大登懸正居士露寬屋子 教登豐現大姉 秀登喜材居士音胤屋子 光登英春大姉	寶膳六丙子 香晴屋敷子 二月廿五日	新花滿深屋去高信士 新蓮生深善妙心信女	先聖明願信女 先祖代々一切精進塔 信實樹林信士	性華妙覺信女 位	圓壽杖覺信士
(左面) 春文化十酉正月五日 (右面) 露文化十酉六月八日 秋文化十一戌九月二日	(左面) 大寬政十年十一月廿三日 大寬政十年七月廿八日 教同 (左面) 光享和二成年七月廿七日 露寬政四子年二月十日 普寬政九巳年十月十日 (左面) 明和七寅九月朔日		(左面) 寬政二成興年七月十七日 (右面) 寬政四子年十二月十四日	(左面) 文政七年三月廿八日 (右面) 天保十巳亥年九月八日	(左面) 性安永二巳年四月廿九日 (右面) 開落	

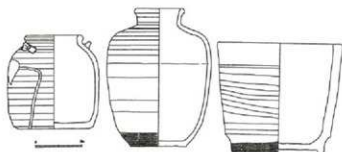
⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
三二四	三二四	三二四	三二四	三二四	三二四	三二四
全善鐘書大姉	證善連住大姉	寶嚴院覺誓元通居士 誓昌院厚誓元妙大姉	先祖代々 露誓貞林知通信女	先祖代々一切精進 慈雲貞明信女	得法進念信士 念成信貞信女 蓮開卒入信士	
(左面) 寬政六寅十二月十一日 (左面) 天保十一寅子年正月十日 (左面) 安政六巳未年六月十九日 (右面) 明治十年旧十一月五日 安常 妻 松村氏	(左面) 寬政六寅十二月十一日 (左面) 天保十一寅子年正月十日 (左面) 安政六巳未年六月十九日 (右面) 明治十年旧十一月五日 安常 妻 松村氏	(左面) 安政六巳未年六月十九日 (右面) 明治十年旧十一月五日 安常 妻 松村氏	(左面) 慶応元乙丑十月朔日 高間氏	(左面) 慶応元乙丑十月朔日 高間氏	(左面) 得親水三戌年二月八日 蓮弘化四年十二月十三日	
			上尊次 落			

番号	①	②	③	④	⑤	⑥
形状	罍	罍	罍	罍	罍	罍
高さ	一三三	一三六	一三三	一三三	一三三	一三三
幅	一三三	一三六	一三三	一三三	一三三	一三三
厚さ	一三三	一三六	一三三	一三三	一三三	一三三
表	先祖代々一切精霊 兵衛墓	西田口	清登浄真信士 関家直真信女	関家継寿信女	正圓覚園信田	善岳光雲信士
裏						
側			(左面) 明治二年十一月廿八日 五十嵐氏	(左面) 安政三丙辰二月十二日	(左面) 天保十四癸卯四月六日 五十嵐	(左面) 文久二年戊辰四月朔日 五十嵐信名即吉
文						
面						
現状	風化 欠損					
写真	図48		図48		図48	

注 寺院に墓地整理中発見された骨壺が四個ほど保存されている。これらは、雑器を骨壺に利用したとみなされるものであり、茶褐色又は黒褐色の釉薬がほどこされておき、ことに下腹部に三耳をとりつけたものもある。いずれも、常滑系統のものともなされる。参考のため、写真(19)及び図(20)を掲げておく。



第19図 墓地発見の骨壺写真

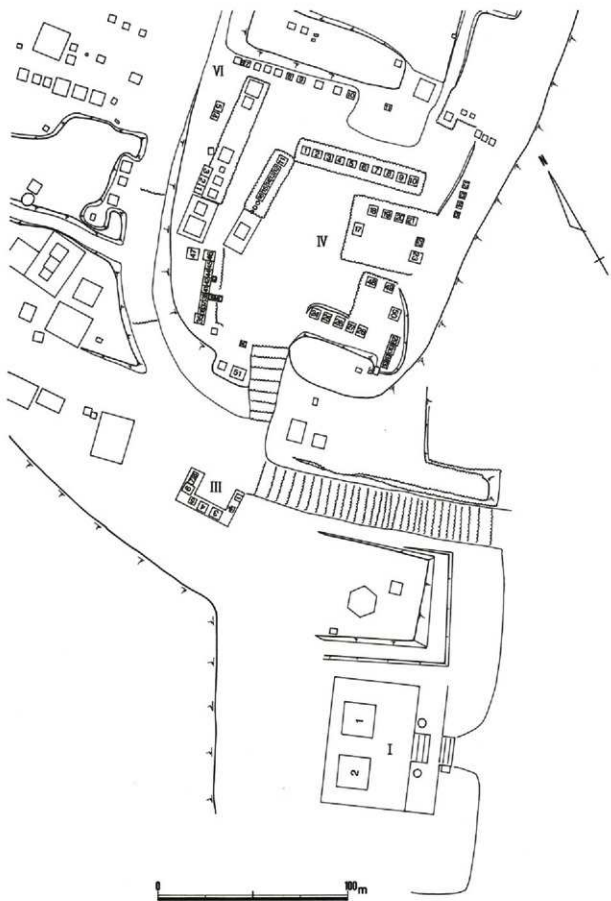


第20図 墓地発見の骨壺図

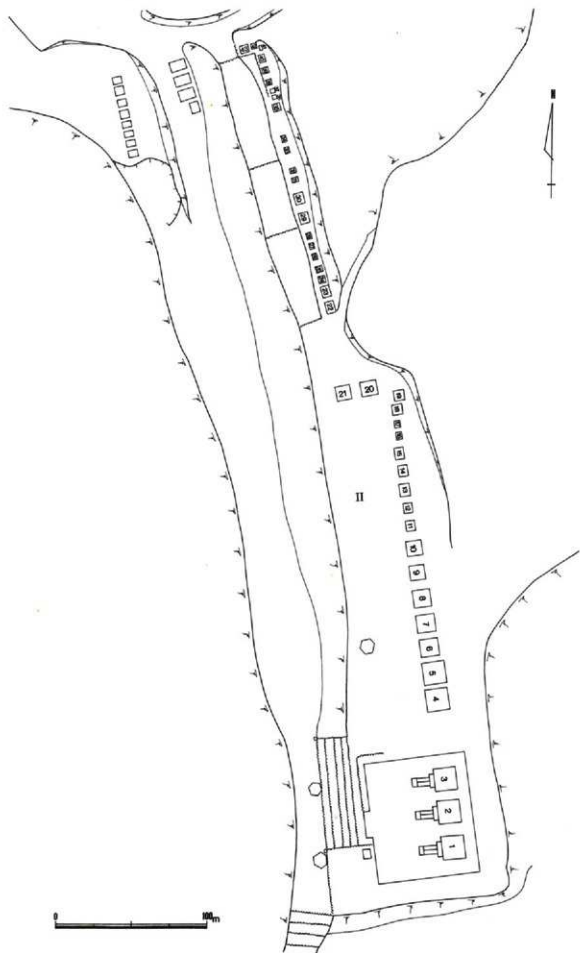
XVII地区 II地区とXVI地区との中間に七基ぐらいの墓標があり、このほか、自然石による簡素なものもある。墓標は、江戸時代の終りのものが多い。



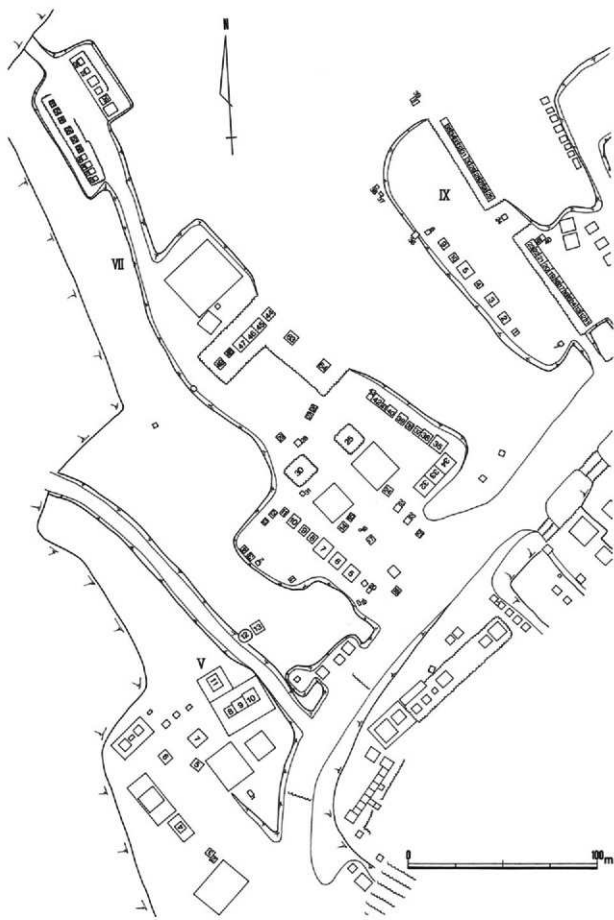
第18図 XVII地区



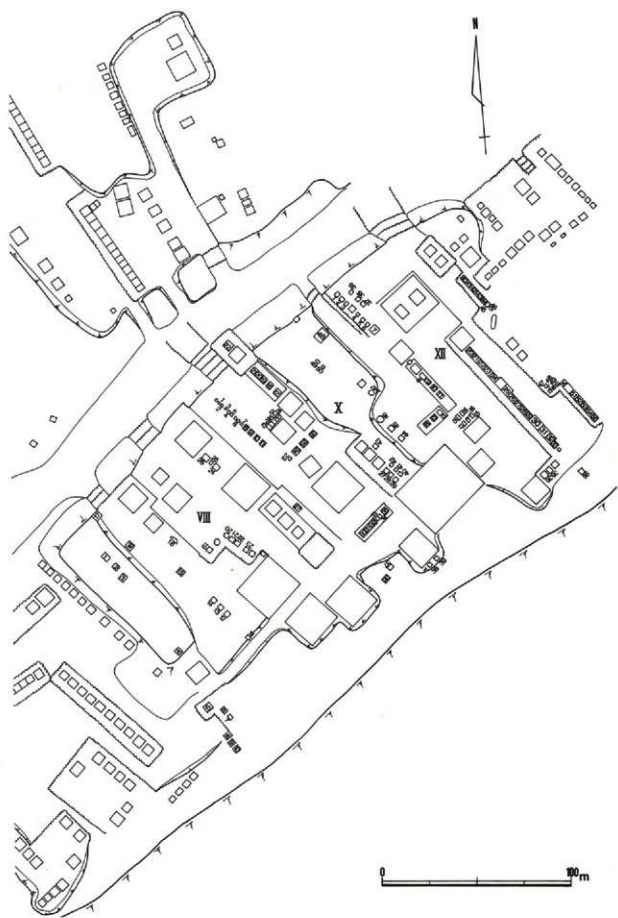
第21图 墓群分布图 (I·III·IV·VI地区)



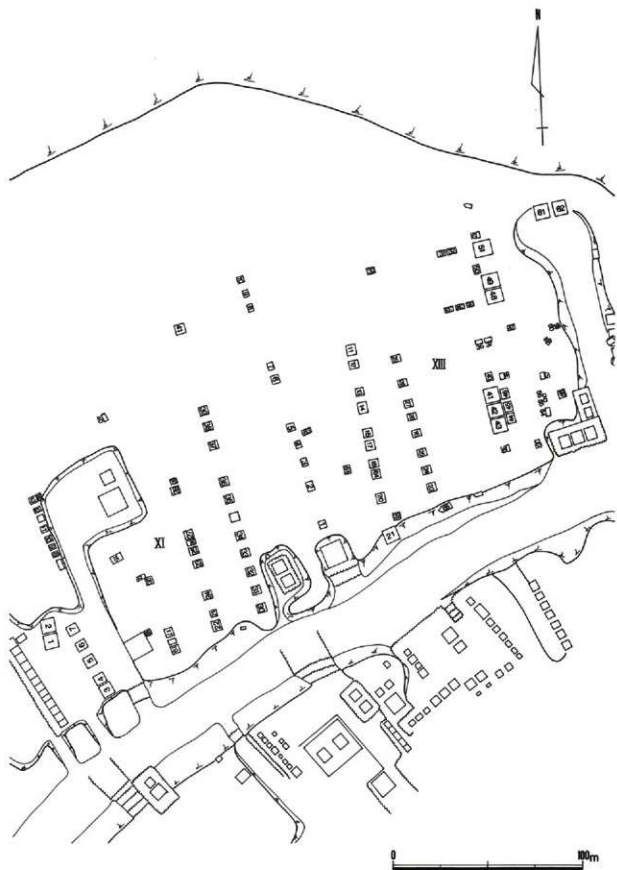
第22图 基群分布图 (II地区)



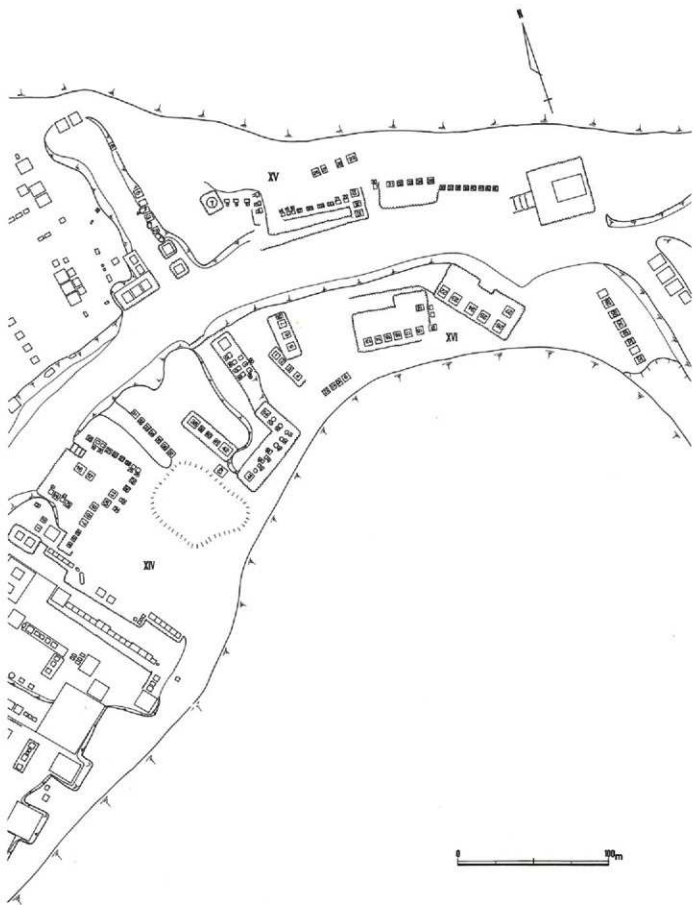
第23图 墓群分布图 (V·VII·IX地区)



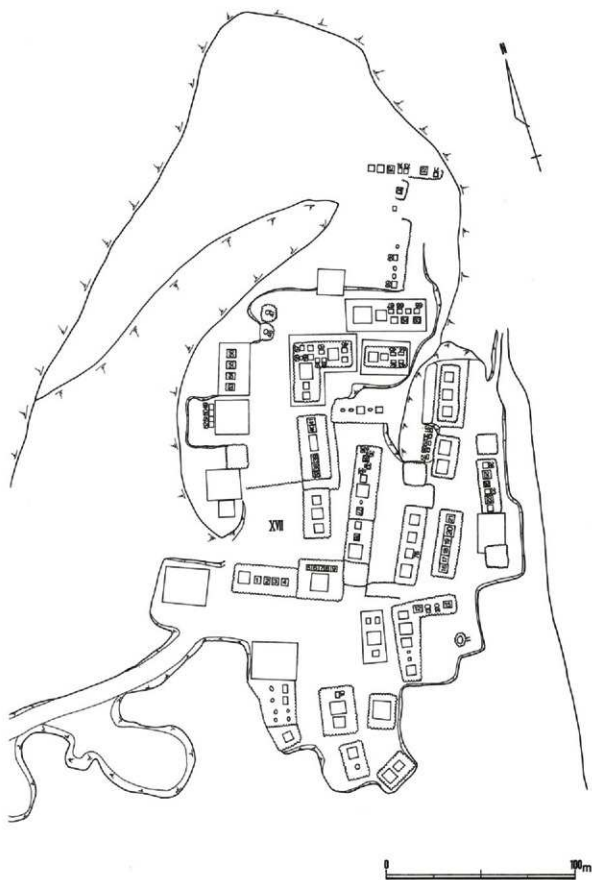
第24图 墓葬群分布图 (Ⅶ·Ⅹ·Ⅻ地区)



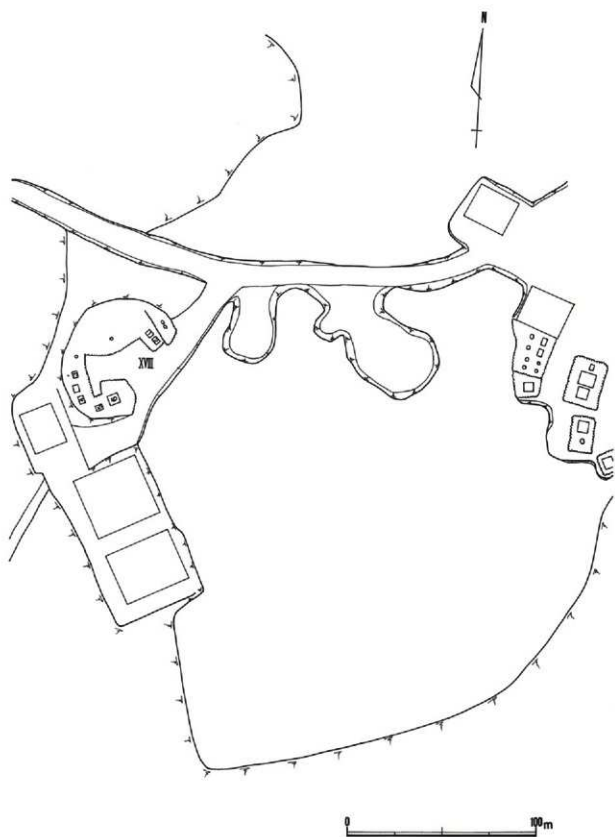
第25圖 墓標分布圖 (XI・XII地区)



第26图 墓群分布图 (XIV·XV·XVI地区)



第27图 基址群分布图 (XN地区)



第280图 墓群分布图 (XVI地区)

三、墓標の種類

前章のように、地区別に墓標を整理したのであるが、ここでは、これらの性格や形態から種類わけにしたい。これらの墓標の石質は、花崗岩・安山岩の類であるが、およそ三種類にわけられる。すなわち、塔の名で用いられている墓塔の類と、墓碑又は墓石といわれる類と、墓そのものでなく、供養塔或いは供養碑の性格をもつものである。

I 墓 塔

墓塔の類は、宝篋印塔・五輪塔及び無縫塔である。

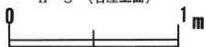
宝篋印塔 横須賀城初代の城主大須賀康高及び二代忠政の墓標二基をはじめ、本多利長が城主になるに及び移置され、又は营造された本多家の家中の墓標その他がある。天正十六年の大須賀康高のものが初現であり、各地の古式の例に比すると、かなり裝飾的な要素が加わっている。すなわち、塔身には開き蓮花を高彫りに浮きださせたり、優麗な書体で梵字が彫られている。また笠部の四隅の隅飾りも、十五度前後外方に反り、渦文を配するが、中に蓮蕾を入れるものもある。相輪部も又、蓮弁・俯せ蓮弁をくりかえして配し、上に宝珠をおく長身のもので、中には、II地区分のように、その各部に、妙・法・蓮・華の文字を刻したのものもある。大須賀康高のものは、総長四〇センチの高さであり、その他II地区4・6・10の諸例も三二〇―三四センチぐらいであり、相輪部の華やかな意匠のくりかえしをもつ特色とともに、撰要寺式ともいうべき一特色をそなえる。なお、川勝政太郎博士は宝篋印塔の形式に関西形式と関東形式との大きい二つの主流のあることを説いている⁽¹⁾が、中世の古式宝篋印塔に指摘されるものであり、天正以降の撰要寺の諸例には指摘されない。しかし、岡崎方面からの石造技術の影響も考えられるので、強いていえば関西式のあらわれといつてよい。

五輪塔 五輪塔は、基礎・塔身・笠・請花・宝珠、すなわち下から数えてその基礎・球形の塔身・宝形造りの屋根の笠・半球形の請花・宝珠の五部をあらわし、地・水・火・風・空の五輪とする通有の形式であるが、他の地域に小型のものもあるのに比して、撰要寺の場合は概して大型である。中でも、II地区にある本多康重・康紀・忠利の三代の五輪塔をはじめ、この地区は岡崎から船で矢作川を下り横須賀港にはこぼれ、さらに撰要寺の西の浦河に入り、門前下で陸上げされた寺伝にいうもので、総じて十一基ある。本多康重のものは、総高三二〇センチである。他に高天神城主小笠原一族の五輪塔が四基XI地区1・2、XII地区61・62にある。またXII地区には、倒壊しているものも見られる。

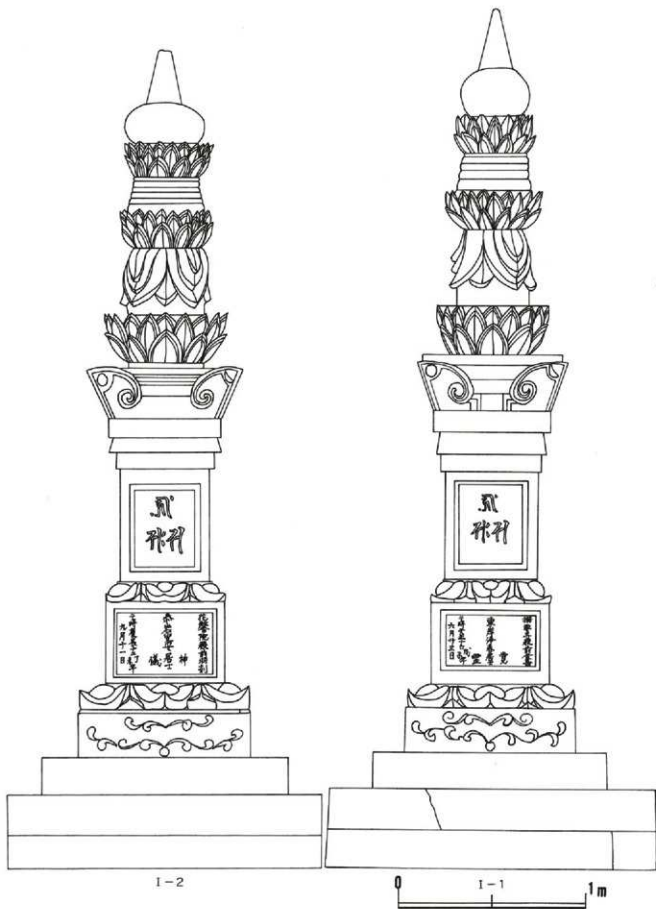
大型なので、一石五輪塔はなく、空輪と風輪が一石、火輪が一石、地輪が一輪と水輪も一石で基礎を含めると五石の組み合せのことが多い。しかしII地区



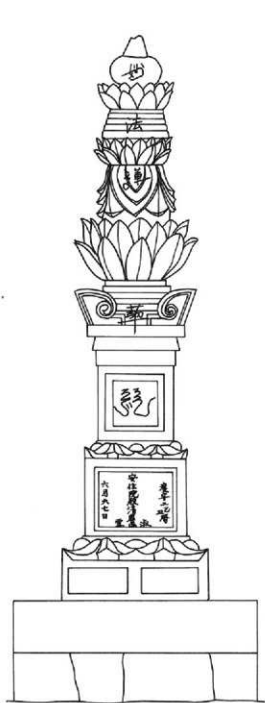
II-9 (台座上面)



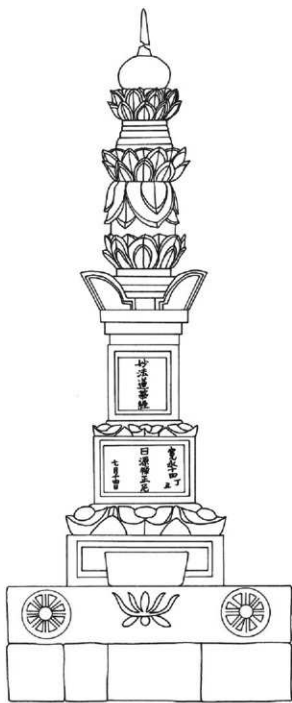
II-10 (台座上面)



第304 墓塔实测图 (I地区-1·2)



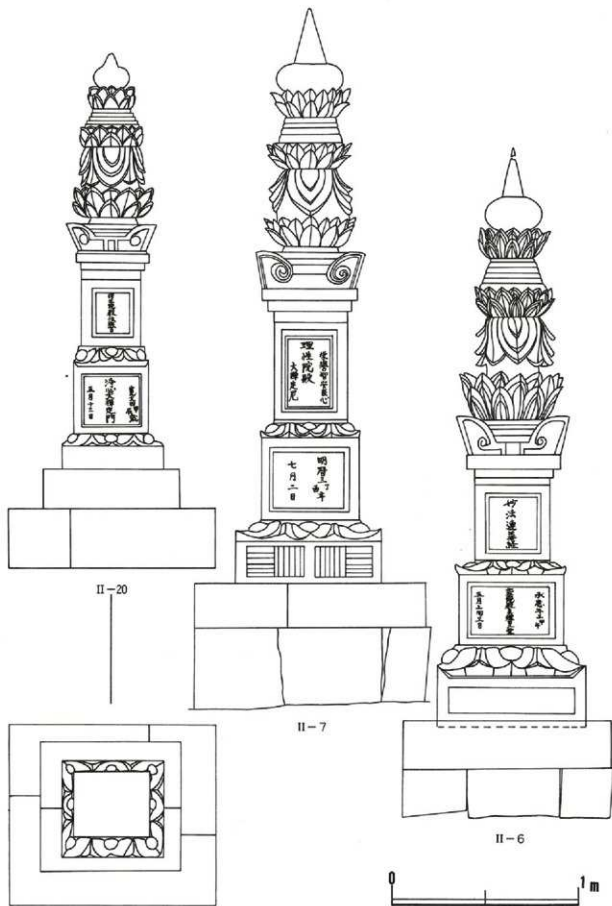
II-5



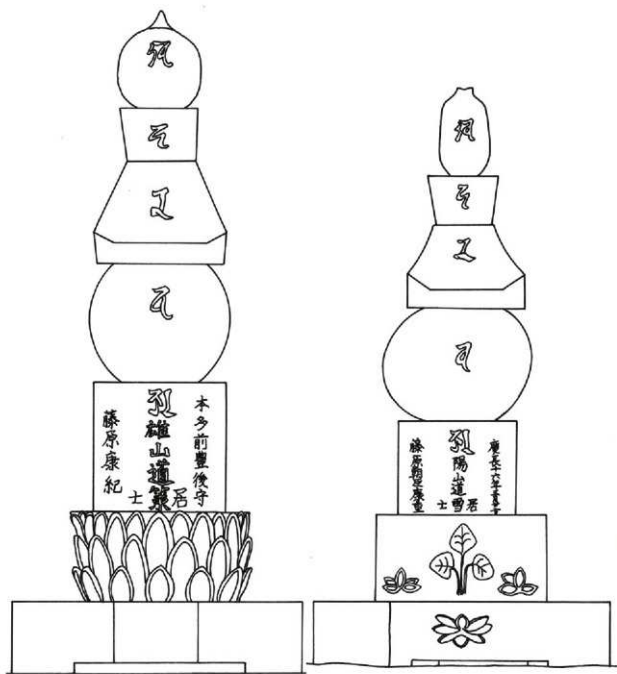
II-4



第31图 墓塔黄洲图 (II地区-4·5)

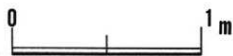


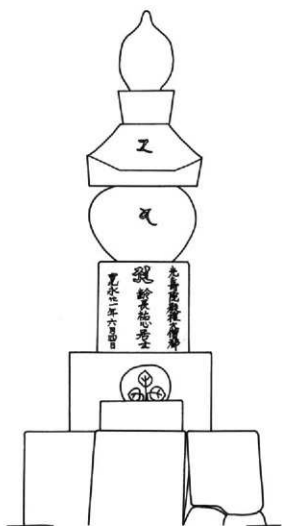
II-20 (台座上面)



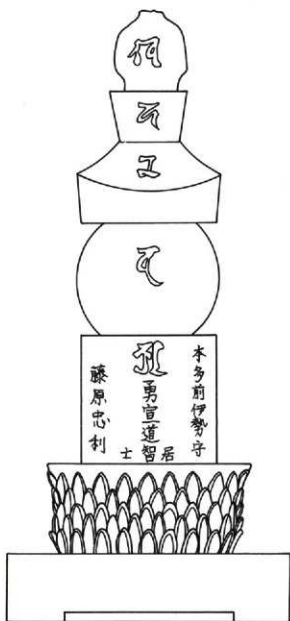
II-2

II-1



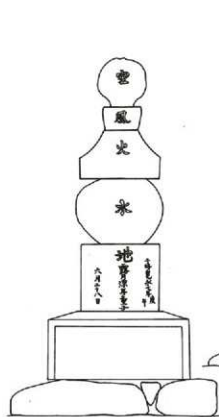


II-8

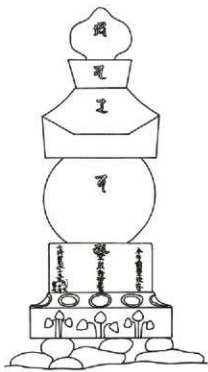


II-3

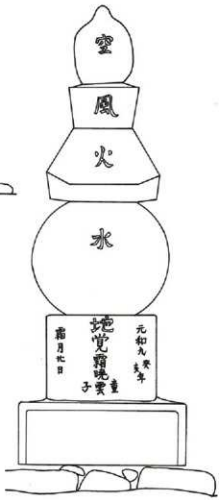




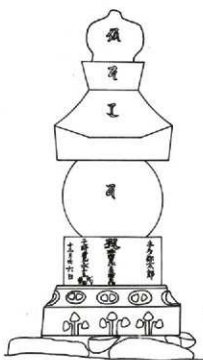
II-14



II-13



II-11



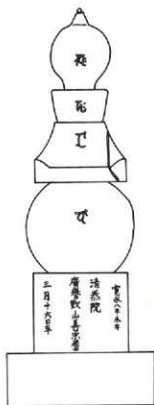
II-12



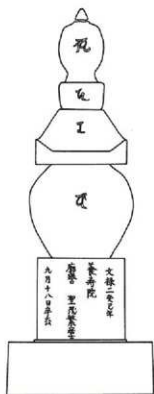
II-15



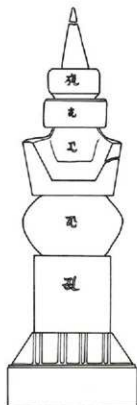
第35图 墓塔实例图 (II地区-11·12·13·14·15)



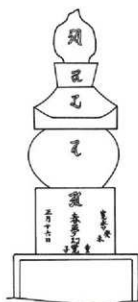
XI-2



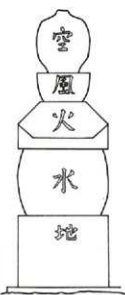
XIII-52



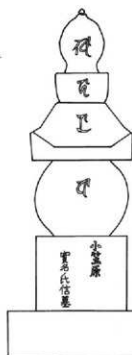
VII-35



II-22

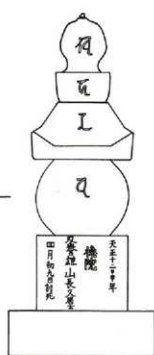


XIII-48



右側面

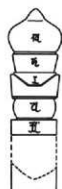
XIII-61



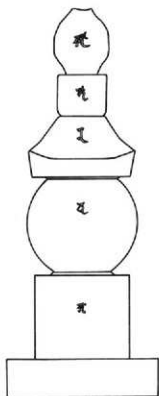
正面



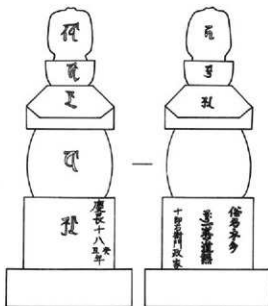
第36圖 墓塔實測圖 (II地区-22、VII地区-35、XI地区-2、XIII地区-48・61・62)



IX-27



II-30



右側面圖

II-35

正面



IV-34

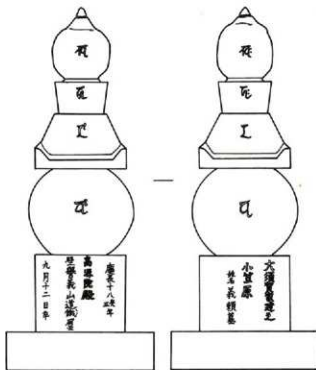


左側面



VII-36

正面



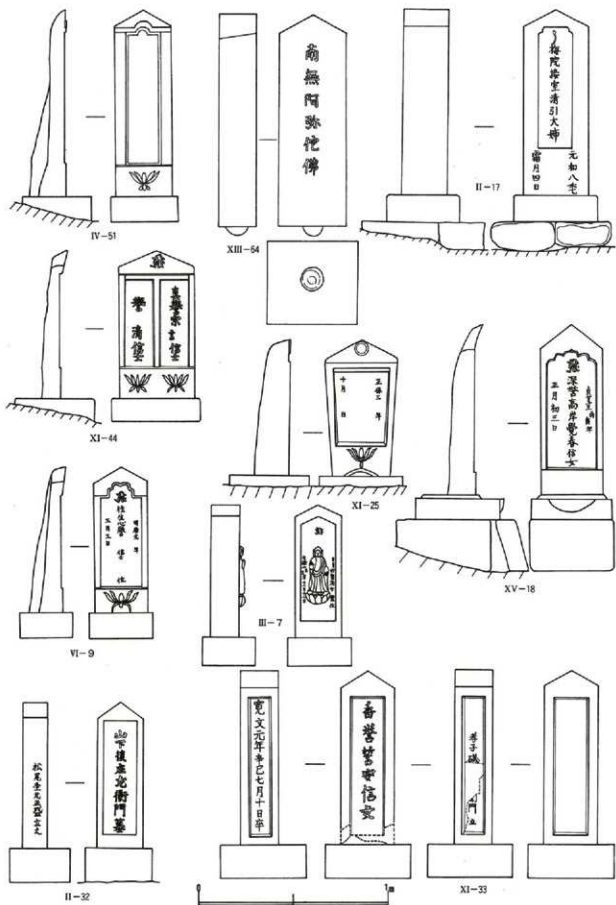
正面

XI-1

左側面



第37圖 墓塔實測圖 (II地区-30・35、IV地区-34、VII地区-36、XI地区-1)



第39图 墓塔实例图 (II地区-17·32、III地区-7、IV地区-51、VI地区-9、XI地区-25·33·34、XIII地区-64、XV地区-18)

35とⅩ地区21とは地・水・火の三輪が一石、風・空輪が一石で、基壇を別にすると二石から成っている。

また、正面に梵字を彫り、他の三側面は素面のものほかに、四面に梵字があるもの、四面に地・水・火・風・空の文字をほりこんだものもある。この区別は次のようである。

四面に梵字のあるもの

Ⅱ地区―1・2・3・8・12・13・22・30、Ⅶ地区―35、Ⅷ地区―61、Ⅺ地区―2、Ⅹ地区―62

正面のみ梵字のあるもの

Ⅶ地区―36

正面に文字、他の三面は梵字のもの

Ⅹ地区―48、Ⅹ地区―21

四面に文字あるもの

Ⅱ地区―14・15

無縫塔 塔身は、丸長で先端は卵形の尖り又は凹頂をなすいわゆる卵塔の類である。基礎の上に垂れ蓮弁をそなえる六角の中台と変り蓮華をもつ講花部とを配し、上に塔身をもつものが多いが、最も古いのは開山の春阿大和尚のもので、総高一一六センチである。Ⅳ地区にあるものであるが、この地区には寺院の歴代の僧の無縫塔が並列している。無縫塔は、このⅣ地区のほかⅤ地区等に若干見られる。

Ⅱ 墓 碑

宝篋印塔・五輪塔及び無縫塔のような墓塔の類のほかに、墓地を構成する大部分のものは、板状及び方柱状の墓碑である。もっとも、この区別は便宜的なもので、明確に区別することのできないものもある。一応ここにいう板状碑は、側面の厚さは、正面の幅に比していちじるしくなく、しかも背面は荒削りが大体同じくらしいもの、すなわち断面正方形のもの、又はこれに近いものを基準とするが、断面が長方形をなすものでも、背面が磨かれ整美されているものも方柱碑となしたい。

板状墓標 上頂部が、三角に尖るものほとんどである。三角状の場合も鈍角又は鋭角をなすもの、まっすぐな線をなすもの、やや丸みのあるカーブをなすものなどもある。一応三角頭(第42図)と三角状弧頂(第42図1―3)とに区別する。またこれらには、頂部の三角と碑身との間に段を設けて碑身の方が低くなり、その段の中央に丸い切りこみを設けるものもある。また三角頂がやや前に傾斜する反りを見せ、頂点からたてに稜線をおろすものもある。

方柱状墓標 現在の墓石にも共通しているいわゆる角碑であるが、正面の幅に比して側面の厚さが、二分の一に満たないものでも、背面が正面・側面と同じく平滑になっているものもこの類に含めた。頂



第41図 板状碑の正面と側面(Ⅱ地区-29)



XV
18



VI
9



IX
39



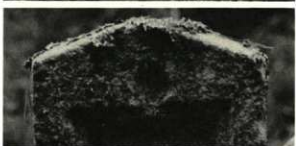
II
29



III
4



VIII
32



II
16



IX
10



II
17

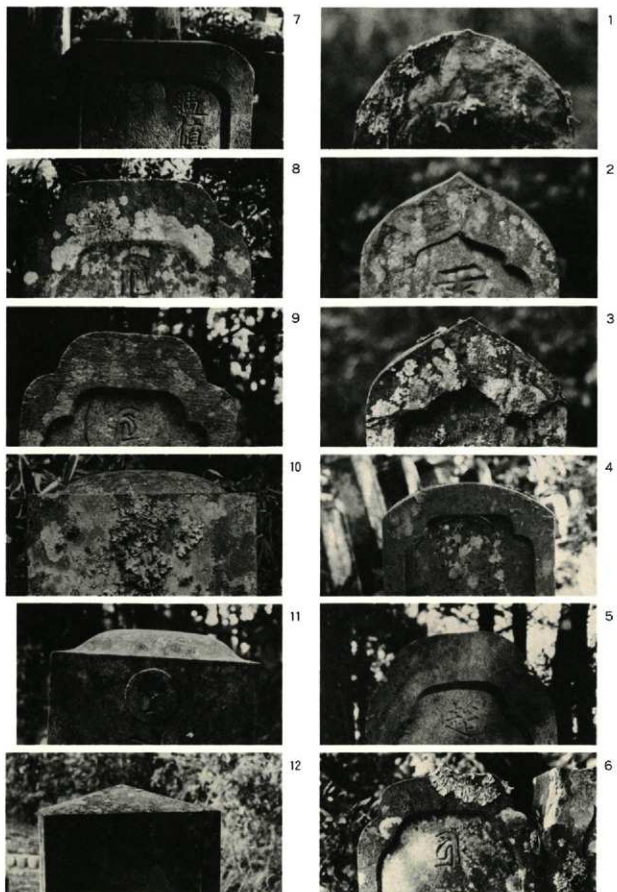


VII
15



VII
52

第42図 三角頭基標の様式



第43図 三角状弧頭・弧頭・二重弧頭・隅丸方頭・隅丸・二重方頭・盛り上げ方頭・三角錐方頭

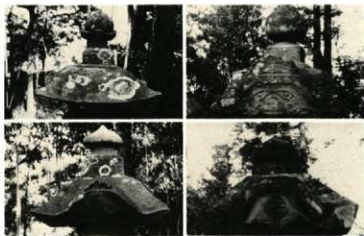
部の形式によって、三角頭、三角状弧頭、弧頭、二垂弧頭、方頭、隅丸方頭、盛り上げ方頭、三角錐方頭等にわけたが、これらの区別は挿図第42図(4-12)に掲げたのでこの説明を省きたい。なお、たとえば方頭を打切形石碑、三角錐方頭を兜巾形石碑、弧頭の一形式を香匣形石碑となしている名称もあるが(たとえば後藤守一「郷土考古学―墳墓を中心として」(郷土史研究講座七)わかり易い名を採用した。笠付方柱状墓標 高い方柱の上に笠をおく形式である。方柱の断面には長方形のものもあるが背面も平滑になっている。笠も破風付きの複雑な意匠を示すものもある。特殊なものとしてXI地区の18のものは、正面もわくをとりつけ一種の位牌形を示している。なお、笠でなく宝珠をあらわしたものもある。



第44図 各面の隅取りのある三角頭角碑 (XI地区-33)



第46図 位牌形笠付方柱状墓標



第45図 笠付方柱状墓標の笠部

III 仏像付光背状墓標

仏像を主体にすれば、仏像に光背をとりつけた形式であるが、むしろ船形の板状光背に仏像を高肉彫りに造りつけたとみた方がよい。各地区にわずかな例がある。これらには供養碑としての性格をもつものも考えられるが、童男・童女の墓標にも見られる。

IV その他の墓標

これらのほかに、自然石のものも若干ある。新しいものもあるようであるが、大型の面の平らかな扁平の自然石を用いたもののほかに、自然丸石の小型のものを墓石にしたものもある。

なお、以上述べたような墓標とみなされる例のほかに、供養塔或いは供養碑と考えられるものもある。さきに述べた來家夫妻の石仏像も、一種の供養的なものと考えたいがこのほか、方柱の上に石仏を配したもの、又は、方柱碑で表面に南無阿弥陀仏の番号を刻したものなどこの類であろう。

注

1 川勝政太郎「日本石材工業史」昭和三十二年



第46回 自然石の墓標



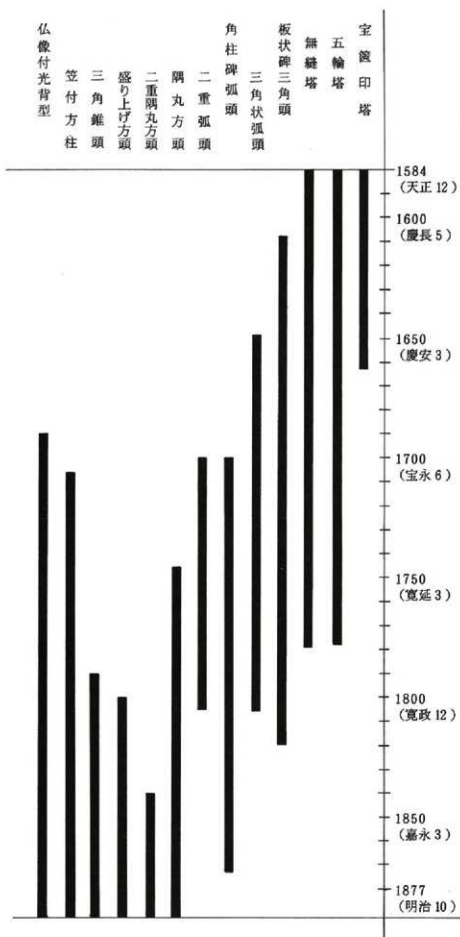
第47回 仏像付光背状墓標 (IV地区-15)

四、墓標の編年的序列

前述のように、種類によって分類し、また地区別に整理した墓標群はそれぞれの個々において、どのような編年的な序列に編成されるであろうか。次に、紀年銘の明らかなおよそ二五〇基について、編年的な序列を表によって整理したものを掲げることにする。

五、墓標の変遷

以上の表のように、編年的な序列にしたがって整理してみると、宝篋印塔・五輪塔又は板状・方柱状の墓標のそれぞれの形式をもったものが、その初現の天正十六年のものから、一応便宜的に区切った明治十年の終末のときまで、およそ三百年の間にわたって、互いに消長があり推移があったことが知られるのである。この消長変遷は、大まかにみると次のような図の如くである。



この表でも知られるように、それぞれの墓標は、時期の経過とともに変化を呈している。宝篋印塔は、初現の天正年間からあらわれて発達しているが、寛文元年（一六六四）のものをもって絶えている。五輪塔は、紀年銘の明らかなものを例にとれば、天正十二年（一五八四）のものが初現であり、万治元年（一六五八）の例をもって終っている。紀年銘の明らかでないものも、恐らくほぼその間のものに位置づけられるであろう。これらに対して、無縫塔は、はじめ開山の僧の墓塔として天正十二年（一五八四）のものを初現とし、しかも、この後も歴代の僧の墓塔としてその形式を伝えている。

板状墓標は、慶長十年（一六〇五）の例からはじまるが、特に万治年間のものには、大型で、碑身下部に蓮の蕾と葉とを配し、水受けを台座にほりつけ、あたかも水槽から蓮が派生しているような技巧をこらしたものもあり、この頃の石工の一つの風格もあらわれている如くである。板状墓標は寛政・文化の頃から少なくなり、一方、断面は長方形であるが、背面も平滑にした方柱状墓標に近いものも発達してくる。しかし、この種のものも、その初現的なものは頭部は三角状をなし、三角頭が深い伝統をつたえていることがわかる。

弧頭の方柱状墓標は、享保の頃からあらわれ、二重弧頭もほぼ時を同じくして発達したようである。また隅丸方頭は、延享の頃すなわち十八世紀の中葉の頃からあらわれ、盛り上げ方頭や三角錐方頭も、これにつづいて出現し、おかれて二重隅丸方頭の形式が発達する。しかし、いずれにせよ、弧頭・二重弧頭・隅丸方頭・二重隅丸方頭・盛り上げ方頭・三角錐頭の方柱状墓標は、十八世紀の初頭から江戸時代の終末まで広く行われ、墓標としての定型をなしていたことが考えられる。

しかも、これらは明治の十年までもつづいているが、特に盛り上げ方頭や三角錐方頭はやがて平頭へと発達し、この平頭は、明治・大正に及んで現代にもつづいている。

笠付方柱状墓標や背光型の板状墓標に仏像を彫刻した例は、特に時期的な関係がなく江戸時代を通じてあらわれているが、ことに笠付方柱状墓標は寛保から安永・文化の頃ののものに多く、また、この頃のこの形式のものは全国的にも広汎な範囲にわたって分布しており、この頃の墓標として、特に贅沢な最高の水準にあるものとして、一部の間に採用された如くである。なお、笠付方柱状墓標の中でXI地区の18の例は、正面に隅取りを見せ、一種の位牌型を示しており特殊である（第46図）。また、三角頭の方柱状墓標の中でもXI地区の33などのように、表面はもとより、側面・背面にも隅取りをなし周瓦を高くする例があり、これらは一六六一年の頃のものであるが、或る限られた時期に発達したものとみなされる。

以上は、墓標の各種類の大きい推移であるが、それぞれの墓標の形態や構造や装飾的意匠を見ても、その変化のあとがたどられる。

まず宝篋印塔についてみると、その構成する塔身や上頂部又は隅飾り等においても変化があり、これにはどこかされている開き蓮弁文や垂れ蓮弁文の彫刻においても同様である。ことに宝篋印塔の構成要素として特色をもつ隅飾りは、それぞれの例を第26図のように集成してみると、その変化の工合がよくあらわれている。

宝篋印塔は、本来金剛界の大日如来の三昧耶形である。小野塚幾澄博士の示教によれば東向が「随方」で本来の向きである。もつとも「運心」で、その



II 6



I 1



II 7



II 2



II 9



II 4



II 10



II 5

第49回 宝體印塔隅飾の各種形式



II 8



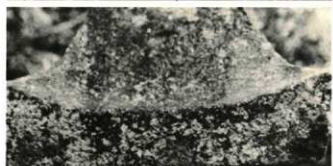
II 2



II 12



II 11



II 30



II 14



II 3



II 15



VII 36



XII 7

第50図 五輪塔 火輪部の履視形式

方向も按配できるという。本寺院に最初に建立されたときみなされるこの二基の宝篋印塔は東向きであり、本来の「陸方」によったものであることが知られる。また向きの違うものは「運心」によったものである。

また五輪塔になっても、その技法において風輪部と空輪部とを一石にし、地輪・水輪・火輪を別石にしたものと、地・水・火輪部と一石に、風・空輪部とをそれぞれ一石にしたものがあるが、後者のものは古い例に多い。また、火輪すなわち笠状の構造の屋根の軒部の形式も、第27図に示したように変化がたどられる。

五輪塔は胎藏界の大日如来の三昧形であり、各輪部の梵字は東・南・西・北の四方にしたがって、それぞれ五大の種子の四転をあらわしており、小野塚幾澄博士の示教によれば、次のようである。

	空	風	火	水	地
発心	キヤ	カ	ラ	ヴァ	ア
修行	キヤ	カー	ラー	ヴァ	アー
菩提	キャン	カン	ラン	ヴァン	アン
涅槃	キヤク	カク	ラク	ヴァク	アク
					(北)

そして、本来、宝篋印塔と同じく東面であり「陸方」である。加地区の二基の五輪塔(61・62)が東面しているのは、その本来の向きにしたがったものである。もっとも墓地等の関係で「運心」にあることもできるし、この場合、この向きは関係ないという。

本寺院の五輪塔の場合、移置した本多家関係のものは、いずれもこの「運心」として向きがかわっている。また、五輪塔の中には、輪部の様子が、発心・修行・菩提・涅槃による方式とあわないものもある。或いは各輪部の積み重ねの場合のミスによるものかも知れない。

無縫塔の場合は、初現の天正十二年(一五八四)のもの、江戸時代末期の例をその頭部において比較すると、あとのものは円頂部に尖りをあらわしていることがわかり、これは、無縫塔の形



第51図 無縫塔上部の各形式

式の一般的な変化と同様である。

板状墓標の三角状頭部も変化がある。頂点が前に屈むように反りを見せている形式は古いものに見られる。また、これには表面に頂点から割線まで上下に直線があらわされている。

上部の横線の区割の中央が、半円形にくいこみを見せているものは、万治年間の頃のものの共通した形式である。

舟形背光状の板状墓標に仏像を半円刻したのも、Ⅲ地区1-7の元禄二年の例のように、比較的古いものも見られる。

方柱状墓標は、板状墓標の頂部の三角形のものから伝統をひいた三角頭が古いものにあられるが、弧頭が三角状弧頭から発達する。特に方柱状墓標の中で、家紋を正面中央上部に刻する傾向は、文化・文政の頃にあらわれ、これより以前は梵字である。この変化も重要であろう。これについては別の後章にも述べたい。

結——撰要寺墓標に関する二、三の問題

前章まで、墓塔・墓碑に関して地区別及び編年別の表を掲げながら、特に種類の推移と形式の変遷を中心として述べた。ここに終章として、若干の問題に触れてまとめたい。

文字の記載

文字は、楷書で端正な筆法で刻まれており、格調の高いものもある。ことに、天正から江戸時代初期の藩主や家中の人々の墓標である宝篋印塔や五輪塔に見られるものには謹厳正硬な趣が見られる。なお墓標における記載用例においては、正面の中央の上に梵字を刻し、その下に戒名を記し、向って右に死亡の年、左に月日をあらわすものもある。また、向って左に本多豊後守などの官位、左に藤原康紀などの姓名を刻するもの、右に死亡の年月、左に姓名を刻するものなど、いろいろの場合が見られる。



II 8



I 1



II 5



II 1



II 9



II 15



II 10



II 4

第52回 文字の記載

文様の表現

文様は蓮弁文を利用したものが多く、これらは垂れ蓮弁・仰ぎ蓮弁・開き蓮弁又は、葉と蕾とをあらわしたものである。ことに、万治年間のものには蕾と葉とを碑面の下に浮彫りし、その下の台座には、開き蓮弁を表面にほどこした水受けをきざみこみ、あたかも葉と蕾とがこの水受けから出ているような趣を示すものもある。本来三笠蓮華は、中世の宝篋印塔等にも見られるものであるが、これから脱化させて特殊な表現を見せており、その頃の石工の技術が見られる。また、開き蓮弁の中には、彫りの浅いもの、力強く浮きだされているものなど、各種も指摘されそこに時代の変化もしのばれる。

VI 3



III 4

第54図 蓮の葉と蕾の表現と水受け

文様の中で、立葵の文様が本多家関係の墓標と見られる。立葵は沼田頼輔博士の研究によれば、徳川氏が従来立葵を用いたが、永禄三年になって、家康は家紋を定めるに際して、本多氏の家紋であった三葉葵の紋を用いたので、本多氏は三本立葵に改め、その後参河岡崎をはじめ本多氏はいずれも立葵紋を用いたという(紋章の研究)。これらの墓標に立葵を用いていることは当然であるが、形態上では、同文の中に立葵を用いたもの、立葵を並列させたものが見られ、しかも細部の点では、彫刻や文様に変化が見られる。



II 9



II 10

第53図 梵文表現の二例



II
6



I
2



I
1



II
7



II
1



II
4

第55回 開き蓮弁の各形式

なお、宝篋印塔の意匠も、時間的に特色が見られるが、ことに隅飾りはその意匠の表現がかなり変化を示している。

家紋の表現

墓碑の正面の戒名の上に家紋をあらわすものが多く、これは近世の墓碑の通有な一表現とみなされる。しかし、この墓地の場合は、初期の三角頭板状碑には家紋はなく阿弥陀の梵字のみをあらわす。しかもその上に丸い刹りを設けている。寛永年間のもも二重隅丸方頭の角碑にかわっているが、これにも梵字をあらわしている。文化・文政の頃から以降はほとんど家紋のものが発達している。家紋の表現の場合も、上部の隅とりの部分にほどこされているもの、飾隅取り内の部分にほどこされているものの二形式がある。

なお、円形の中に家紋を配する手法は、先行する三角頭板状碑の上部の円形刹りこみの手法からの発展とも見られぬことはない。

個人墓と夫婦墓

墓碑の戒名を見やると、個人を示すものと、二重位を刻し夫婦をあらわすものがある。宝篋印塔や五輪塔又は三角頭板状碑は、個人の戒名のみである。この個人墓碑は元禄の頃まで見られる。その後のものには刈地区・16・刈地区・45・刈地区・16・刈地区・10などのようにつき、明治まで存続する。

墓地の選定

寺院の創立当初に建立された藩主の墓碑は、本堂の近くに見られ、また、たとえ移転されたものでも、奥の高台の地に、あたかも城からも望まれる場所に営まれている。また、寺院住職の墓碑も参道入口近く、本堂に近く営まれている。

藩閥係の家中の人々の墓碑は、眺望もよい高燥の地に多いことも指摘されるが、当時の町人や百姓の墓が、墓地の端とか、最も奥まったところなどに見ら



第56図 立石の家紋の諸形式

れる。

結 び

現在なお法燈のつづいている寺院において、墓地が寺域内にあり、しかも、寺院の創建当時から現在に至るまで墓塔墓碑の類がそのまま残され、過去帳もそなわり、かつ子孫の壇家の人々によって護持され墓参のつづけられている例は比較的少い。撰要寺の墓塔・墓碑の類は、この点において重要な文化遺産ともいえる。

今回の調査は、墓地に隣接している一部地域も既に削土され、墓地の文化遺産としての保全の上にも暗影が投ぜられているための緊急な調査であったが、その研究は近世考古学ことに発掘をともなわないで行った考古学の研究として、意義深いものと考えている。しかも、墓という、人々の習俗慣習の中の儀礼的な行為のあらわれである資料についての近世の動向は、単に近世のみでなく、中世又は古代、或いは弥生時代の墓制や古墳の研究にも示唆するところが少なくないであろう。たとえば、三角頭をもつ板状碑が、次第に角碑に移行しつつも、三角頭の形式が強靱な伝統をつたえていること、或る定型となった角碑は、一つの時期の中に不動の地位を占めていること、江戸時代の終りから明治初年までの墓碑には変化がなく、明治維新という大きい政治的変革があつたとしても、民衆の習俗慣習としての墓制には何等の変貌もなかつたことなど、先行の墓制にも示唆をあたえる一、三の例である。

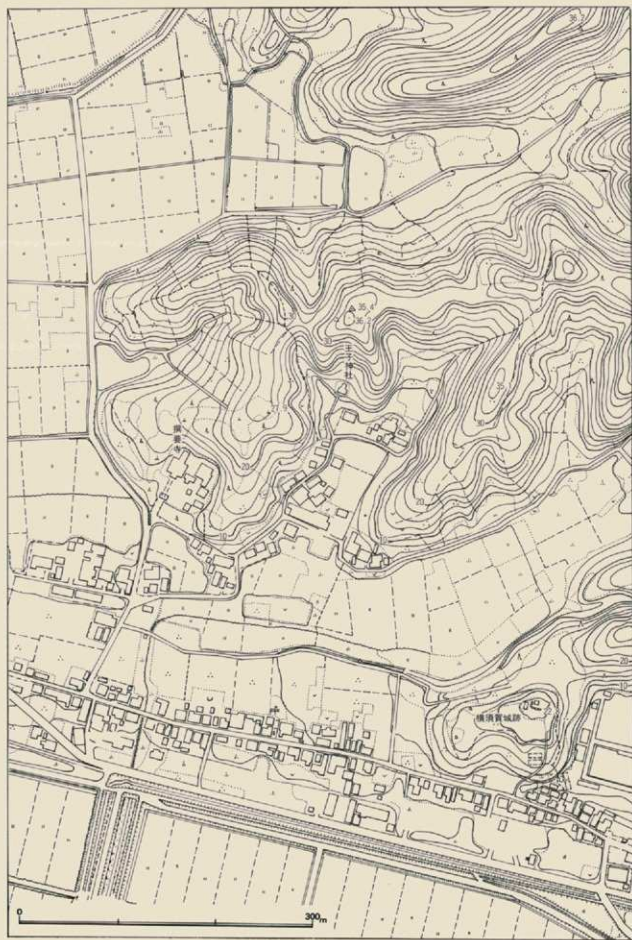


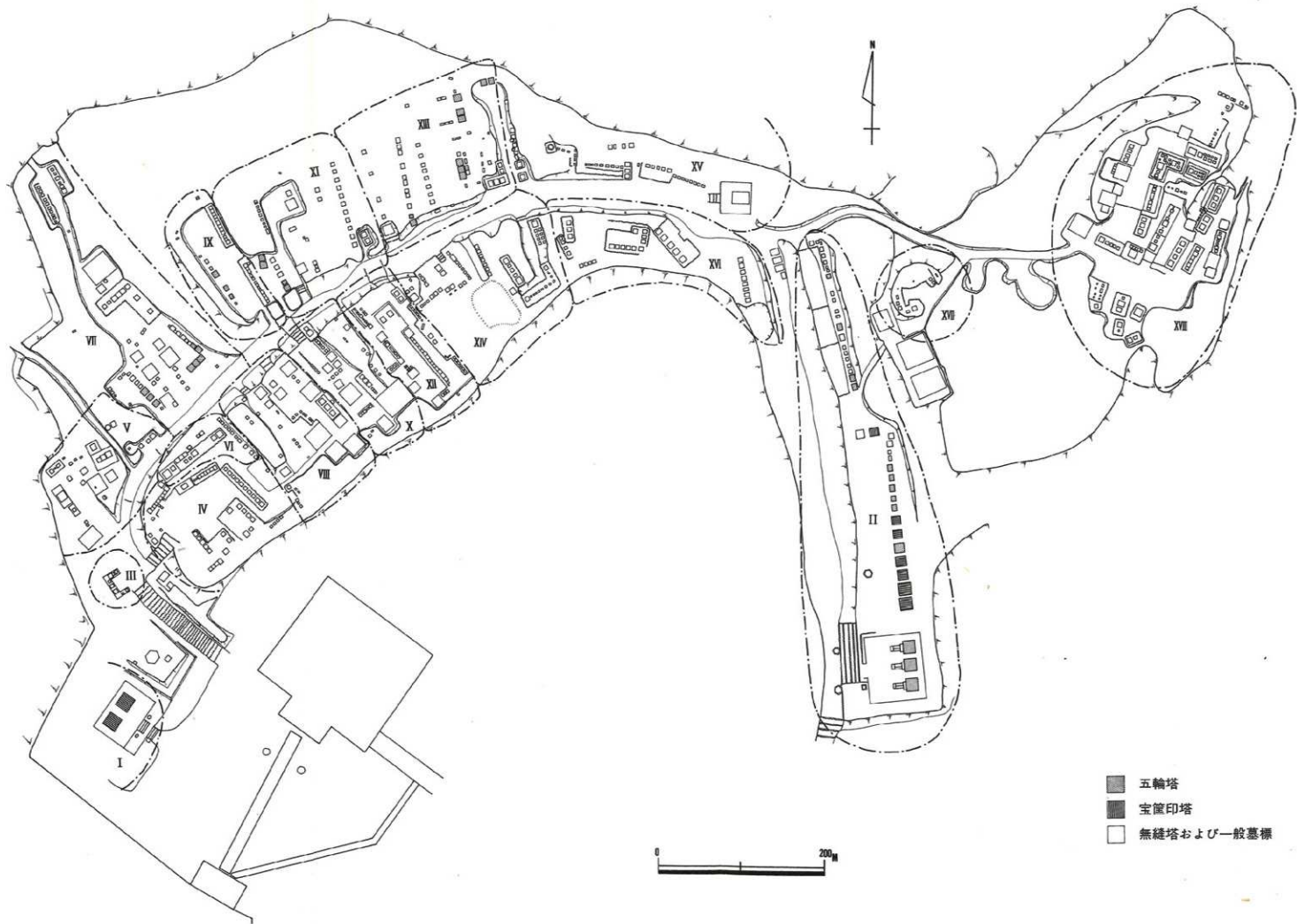
第57回 頭書の見字と紋章

図版第一 撰妻寺の位置（航空写真）



図版第二 撰要寺周辺地形図





- 五輪塔
- 宝篋印塔
- 無縫塔および一般墓標

0 200m



圖版第五 大須賀家墓所（丁地区）



圖版第六 大須賀康高墓塔



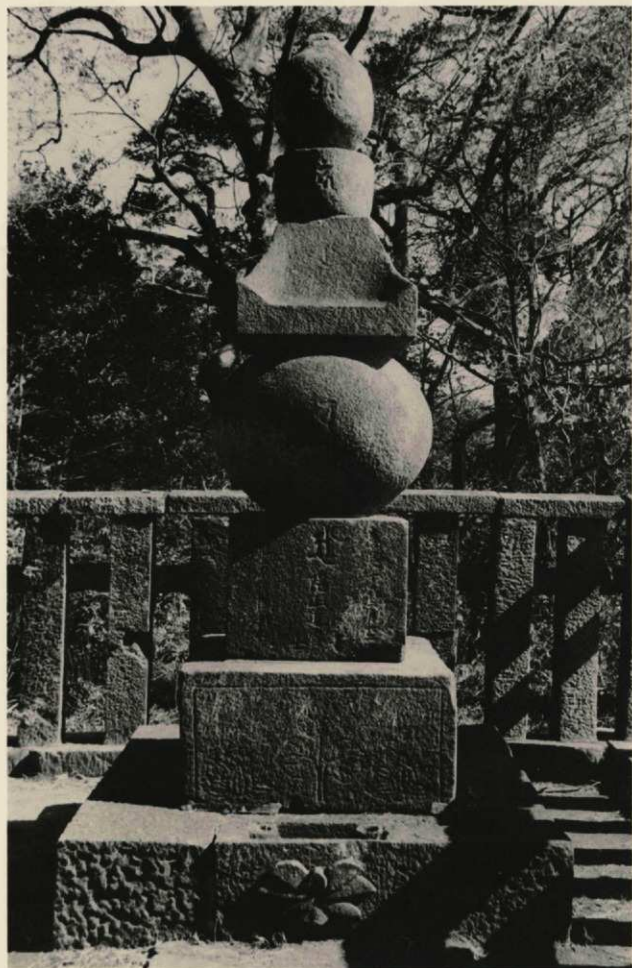
圖版第七
大須賀忠政墓塔



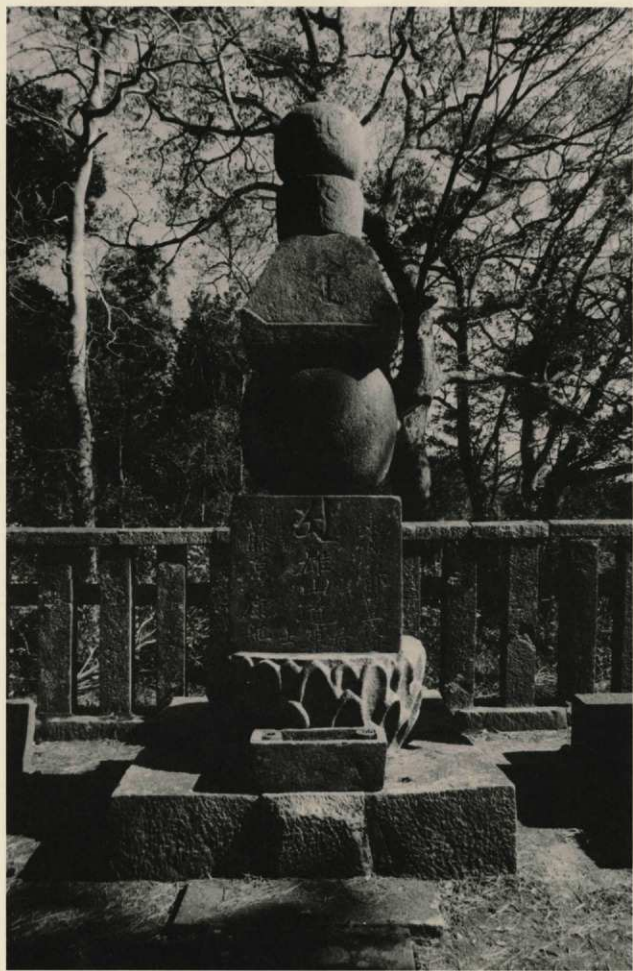
図版第八 本多實墓所（江地区）

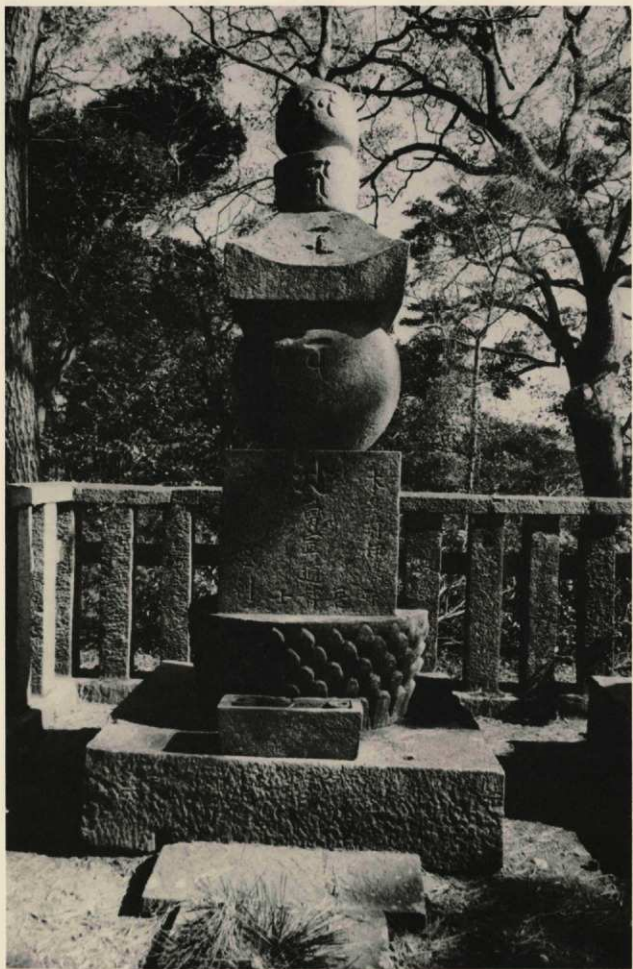


図版第九 本多重喜塔（日地区）



図版第一〇 本多康紀墓塔（日地区）





図版第一一 本多忠利墓塔（日地区）









圖版第一六
寶蓋印塔（山地区）











12



11



15



14



13



20



18



16



21



19



17



31



28



22



33



29



23





5



2



7



3



8



4





17

14

11

18

15

12

19

16

13





38



35



31



39



36



32



40



37



34



48

45

42

49

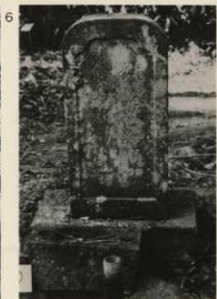
46

43

51

47

44





8



5



1



9



6



2



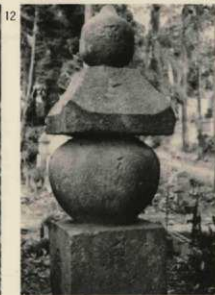
10



7



4



15

8

5

17

12

6

18

13

7



39



35



32



40



36



33



41



38



34



45

45

42

64

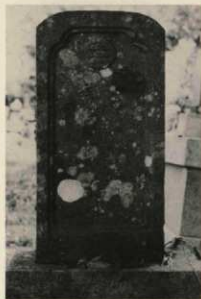
63

47

56

52

51





14



11



1



15



12



6



19



13



8



31



28



20



37



29



22



39



30



23



29



24



18



44



27



20



46



28



22



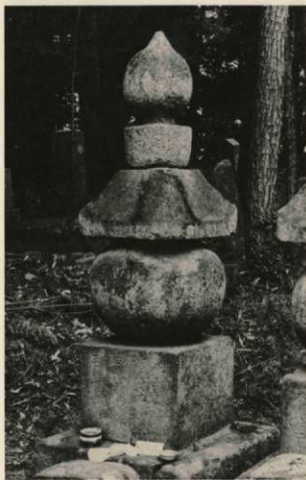
3



1



4



2



24



13



5



33



19



6



20



31



7



45



40



14



49



43



21



51



44



25





41



34



9



52



35



11



53



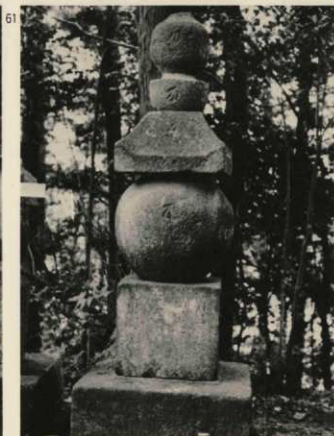
40



21



61と62(向って右62・向って左61)





20



10



3



42



11



4



54



16



5



20



17



6



25



18



7



34



19



15



18



9



1



29



11



5



32



14



7



1



25



1



2



38



10



5



46



11

昭和五十六年三月二十五日

撰要寺基塔群

著者 斎藤 忠

編集者 撰要寺基塔群調査団
発行者 大須賀町教育委員会

